

レオノール・フィニー 挿画集『サラゴサ手稿』について

上原和美

I はじめに

宮崎県立美術館では、日本の前衛美術の先駆者として活躍した郷土作家、瑛九（1911-1960）を核に、作品収集を進めてきた。瑛九が試みた表現の源泉をたどる意味で、シニャックやルオー、ピカソ、クレールら海外作家の名品も収集している。その中で、瑛九の表現の根幹に関わるシュルレアリスムには特に力を入れており、マグリットやエルンスト、ダリなどの著名な作家はもちろん、国内では収集例が少ない作家の作品も数多く収集し、一定のコレクションを形成している。

こうした収集活動の中で、平成29年度にレオノール・フィニー（1907-1996）の挿画集『サラゴサ手稿』を収集した。フィニーはシュルレアリスムのグループにこそ参加しなかったが、アンドレ・ブルトンやマックス・エルンストら多くのシュルレアリストと交流を持ち、シュルレアリスムの展覧会にも出品している。当館では、他にフィニーの油彩2点も収蔵している。本挿画集は、21点の挿画が入った挿画本と、同図柄の21点の版画がセットになったもので、幻想的な物語と官能的なフィニーの表現が響き合う優れた作品集である。原作はポーランドの作家ポトツキの手になる大著で、主人公の60日を超える旅路の中で語られる数多の怪奇譚が複雑に入り交じる物語であるが、本作にはその一部の10日余りの物語が、所々に省略を施しながら掲載されている。そのテキストにフィニーの扉絵や挿画が付けられており、フィニーが描いた挿画が物語のどの場面に相当するのか、分かりにくいものもある。また、そもそも原作には複数のバージョンが存在しており、物語の全体像を把握するのも容易ではない。

本稿では、挿画集『サラゴサ手稿』の詳細についてまとめるとともに、フィニーの挿画が表現する内容を把握するために挿画本のテキストと原作との比較を行い、本作について今後研究を深めるための基礎資料としたい。なお、本稿において、原作やそれに関わる文献・資料等に登場する固有名詞等の表記は、後述の工藤幸雄による日本語訳書『世界幻想文学大系 第19巻 サラゴサ手稿』（国書刊行会）によることを記しておく。

II J. ポトツキ『サラゴサ手稿』について

本論に入る前に、「幻想文学の最初にして最高の存在」とも「世紀の奇書」ともされる大著『サラゴサ手稿』について触れておきたい。

本書は、民俗学・歴史学の碩学であったポーランドの大貴族ヤン・ポトツキによる、エロスとオカルトに満ちた長編粋物語である。主人公アルフォンスにふりかかる悪夢のような出来事を軸に、彼が会う様々な人物たちが語る不可思議な体験談が重層的に展開し、ポーランドの『千一夜物語』、18世紀の『デカメロン』とも称される。

以下、その内容や刊行の経緯などを述べる。

1. 著者：ヤン・ポトツキ（J. ポトツキ）について

ヤン・ポトツキ（1761-1815）は、ポーランドの大貴族の家系に生まれる。フランス語で小説を著

し、シュルレアリスムとも関わりのある詩人、ネルヴァル¹などに強い影響を与えた。作家専業ではなく、むしろ旅行家、考古学者、歴史家、民族学者として知られ、トルコ、エジプト、オランダ、スペインなど様々な国を旅し、そこで得た成果として多くの紀行や学術論文を生み出した。

18世紀後半、ポーランドは隣接するプロシア、ロシア、オーストリアの列強3国に分割・支配される。19世紀に入ると、ナポレオン1世と彼を支持したポーランド人たちにより、ワルシャワを含むプロシア領にワルシャワ公国が建国されるが、ナポレオンのロシア遠征失敗を受けて1815年に解体・再分割され、その大部分がポーランド王国となった。その年の12月、ポトツキは熱病と神経症による鬱状態や妄想に苦しんだ挙げ句、54歳で自らその命を絶った。

1804年に著した『サラゴサ手稿』は、検閲の目をくぐって秘密出版されたが、戦後フランスで文芸批評家のカイヨワ²やトドロフ³によって取り上げられ、幻想文学の古典としての地位を確立するに至った。

ゴヤの筆と伝えられる肖像画がある。

2. 物語の内容

主人公アルフォンスがシエラ・モレナ山脈をさまよった60日余り⁴の日記という枠組みの中に、彼が道中で出会う様々な人物によって語られる自分の生い立ちや体験談、書物の中から抜き出してきた架空の物語といった数多くの話が入れ子状に詰め込まれた物語である。アルフォンスとイスラム教徒の姉妹との間に展開される、「2人と官能的な一夜を過ごした翌日に、縛り首となった兄弟の死体の間で目を覚ます」という妖しくも恐ろしい体験を軸に、アルフォンスが出会った人々による身の上話や怪奇譚が次々と披露され、更にその中の登場人物が新たな怪奇譚を語り、物語は重層的に展開する（詳細は稿末に付した「資料1：『サラゴサ手稿』梗概」を参照されたい）。

アルフォンスが出会う人々は、自身の話を終えると、彼とともに次々と新たな物語の聞き手となる。美しい姉妹との恐ろしい体験は、アルフォンスのみならず幾人かの登場人物の身にも降り掛かり、繰り返し語られる。ジョバンニ・ボッカチオの『デカメロン』は、ペストの流行から逃れるためにフィレンツェ郊外にこもることになった男女10人が、退屈しのぎのために1日ずつ交替で恋愛話などを語るという内容であるが、『サラゴサ手稿』では、複数の物語が同時に進行し、日をまたぐ度に中断・再開され、他の物語を内包するなど交錯しながら語られる。物語の構造としては、『デカメロン』よりも、枠物語の手法で書かれた代表的な物語の一つであり、王の蛮行を止めるため、側近の娘シェヘラザードが王のもとに嫁いで毎晩王の興味をひく物語を語って聞かせるという形式をとる『千一夜物語』に近い。余談だが、工藤幸雄による日本語訳書の解説では、ポトツキが長患いをしていて妻のために『千一夜物語』を読んで聞かせており、最後まで読んでしまった後、妻の求めに応じてこの物語を書

¹ ジェラルール・ド・ネルヴァル (1808-1855)。19世紀フランスのロマン派詩人、小説家。象徴主義の先駆とされ、20世紀にブルーストラにより再評価された。主著に『火の娘たち』『オーレリア』『幻想詩集』など。シュルレアリスム運動にも影響を与え、ブルトンは『シュルレアリスム宣言』において、ネルヴァルが『火の娘たち』の献辞の中で用いた「シュベルナテュラリズム (超自然主義)」という言葉に言及し、ネルヴァルが「超自然的」な夢想状態の中で詩作したことを取り上げている。

² ロジェ・カイヨワ (1913-1978)。フランスの文芸批評家、社会学者、思想家。神話や戦争、遊び、祭り、夢など、多岐にわたる研究・著作がある。主著に『神話と人間』『人間と聖なるもの』『遊びと人間』など。長く忘れ去られていた『サラゴサ手稿』を戦後再発見し、自らの編集により同書が刊行される際には序文を寄せた (*Préface in Le Manuscrit trouvé à Saragosse*, Gallimard, 1958)。

³ ツヴェタン・トドロフ (1939-2017)。ブルガリア出身で後にフランスに帰化した詩学者、文芸批評家。文学の記号論的研究を進め、構造主義の文学批評の先駆となる。主著に『小説の記号学—文学と意味作用』『幻想文学論序説』など。『幻想文学論序説』(邦題：幻想と文学—構造と機能を改題)で『サラゴサ手稿』を取り上げ、「幻想文学の古典」としてその本質を探った。

⁴ カイヨワは66日としているが、近年の研究では6つの「デカメロン (10日間の物語)」プラス1話の61日とされている。

き下ろしたという説があるが、ポトツキの妻は執筆時期の前に亡くなっており、このエピソードは作者自身による作り話かもしれないというポトツキ研究者のククルスキ⁵による考察を紹介している。

3. 刊行の経緯

出版の経緯については、工藤幸雄⁶による訳書『世界幻想文学大系 第19巻 サラゴサ手稿』（紀田順一郎・荒俣宏 責任編集、国書刊行会、1980）の巻末に掲載された工藤著「ヤン・ポトツキについて」や、畑浩一郎『『サラゴサ草稿』研究序説』（『仏語仏文学研究』43巻、東京大学仏語仏文学研究会、2011）などに詳しい。

(1) 初版から再発見前まで

フランス語⁷で書かれた初版は、作者ポトツキの生前、1804-05年にロシアの首都サンクト・ペテルブルクで出版された（*Alphonse Van Worden manuscript trouvé à Saragosse*）。性的な描写や反体制、反教會的と捉えられがちな著述が多かったためか、ポトツキの自家用印刷所による秘密出版であり、作者の名も掲載されなかった。主人公アルフォンスの60日余りに及ぶ旅を描いた物語であるが、1804年末に出版された第1冊にはその10日目までが掲載され、100部だけの出版であった。標題を印刷した表紙もなく、手書きの文字で一つ一つタイトルが記されていた。翌05年初めに出版された第2冊には、その後13日目までの分が収められているが、48ページで中断された不完全な印刷であった。ポトツキの生前に刊行されたフランス語版はこれだけで、草稿の一部が散逸して失われてしまっていたこともあり、長くフランス語原文による完全版が世に出ることはなかった。

秘密出版ではあったが、物語はペテルブルクの上流階級に喜んで迎えられたようである。長く作者が伏せられていたため、ポトツキの名が公になるまでには、幻の原作者としてフランス幻想文学の祖と称されるノディエ⁸や、18世紀に稀代の詐欺師、錬金術師、オカルティストとして名を馳せたアレッサンドロ・ディ・カリオストロの名が挙げられたこともあったようだ⁹が、出版当時のロシアの読書人の間では、ポトツキの手になるものだという事も知られていたようだ。その後広くヨーロッパに評判が伝わり、ポトツキの生前に2冊のパリ版が相次いで出版された。1813年の *Avadoro, histoire espagnole*（アバドロ、イスパニア物語）、1814年の *Dix journées de la vie d'Alphonse Van Worden*（アルフォンス・ファン・ヴォルデンの10日物語）（いずれも Gide fils より出版）である。やはり作者の名は明かされず、前者には「ヤン・ポトツキ伯爵」の頭文字 M.L.C.J.P (Monsieur le Comte Jan Potocki) だけが掲載されている。1814年版には、唯一巻頭に「緒言 (Avertissement)」

⁵ レシエック・ククルスキ (1927-2009)。英語読みはコワコフスキ。ポーランドの哲学者、作家。ワルシャワ大学の哲学史教授を務めていたが、後にイギリスに亡命してオックスフォード大学に赴任。カナダやアメリカの大学の客員教授も務めた。主著に『マルクス主義の主要潮流』など。ポトツキ研究者として、ポーランド語版（ワルシャワ版）の監修を務める他、ドイツ語版 *Die Handschrift von Saragossa oder Die Abenteuer in der Sierra Morena*（サラゴサ手稿、もしくはシエラ・モレナの冒険）(Diana Verlag, 2002 など)の編者にも名を連ねている。

⁶ 工藤幸雄 (1925-2008)。翻訳家、ロシア・ポーランド文学者。ポーランド語翻訳の第一人者。東京大学仏文学科卒業後、共同通信社の外信部記者、ワルシャワ大学日文学科講師を経て、多摩美術大学教授となる。主著に『ワルシャワの七年』『ぼくの翻訳人生』など、訳書に『ブルーノ・シュルツ全集』などがある。

⁷ ポトツキの著作は専らフランス語で発表された。当時、フランス語は国際語として学問の言語、貴族階級の社交語とされており、ポトツキも主にフランス語で育てられた。12歳でスイスに送られたポトツキは、生地のドイツ語やポーランド語などに加え英語も身に付け、成年までに8つの言語を操ることになる。

⁸ シャルル・ノディエ (1780-1844)。フランスの小説家。ロマン主義運動の中心となる。フランス幻想文学の祖とされ、幻想的な作風はネルヴァルらに引き継がれた。主著に『トリルビー』『バン屑の妖精』など。

⁹ 篠田和知基『『サラゴサ手稿』の幻想』『世界幻想文学大系 第19巻』月報28、国書刊行会、1980、p.1

が加えられている。それに先立つ 1809 年にはドイツ語版 *Abentheuer in der Sierra Morena* (シエラ・モレナの冒険) (I, Band. Leipzig) も刊行されており、作者は某伯爵とされた。

1847 年に全訳¹⁰のポーランド版初版 (ライプツィヒ版) が刊行され、その後 1950 年からはワルシャワ版として版を重ね、物語はポトツキの母国ポーランドでのみ長く読み継がれることになる。時系列ではカイヨワによる再発見後になるが、1965 年にはワルシャワ版の豪華本 (2 万部) が刊行され、同年、これらを原作にポーランドにて映画化もされている (ヴォイチェフ・イエジー・ハス監督、邦題「サラゴサの写本」)。

(2) カイヨワによる再発見後

1958 年、カイヨワによる再発見を経て全体の 1 / 3 程度 (14 日分) が Gallimard 社から刊行された。カイヨワが、1814 年版のアルフォンスの 10 日間の物語と、その続編に当たる 1813 年版のアバドロの物語から選んだ数章を編集したものである。これをもって、『サラゴサ手稿』はポトツキの没後 140 年以上を経て、フランス語圏で改めて紹介されることとなり、ようやく作者の名も明かされた。しかし、その後も様々な草稿に基づいた校訂作業の過程で作品の姿や解釈が変化していき、物語の本当の全体像をつかむのは困難な状況であった。

1972 年、ワルシャワ大学でカイヨワらの出席のもと開催された国際シンポジウム「ヤン・ポトツキと『サラゴサ草稿』」において、ポーランド人研究者マリア・エヴェリナ・ジュウトフスカが、ポトツキの新たな草稿が大量に発見されたと報告した。これにより、物語の本来の姿や全体像を把握する研究の大きな進捗が期待されたが、Gallimard 社から刊行されると予告されていたにも関わらず、校訂作業が長引きなかなか刊行されなかった。そんな中、1992 年に前述のジュウトフスカ版とは全く異なる版がルネ・ラドリザニの編集により José Corti 社から刊行され、これが初めて 60 日余りの物語の全体像をフランス語で伝えるものとなった。この版は、ポーランド、ロシア、フランスなど各地に存在するポトツキの草稿や写し等を照合し、欠落部分をドイツ語版 (ポーランド語訳のライプツィヒ版を基にドイツ語訳したもの) から更にフランス語に訳し直して補ったものである。テキストの信憑性については疑問が残るが、後に大幅改訂の上文庫化されて多くの読者を得ることになる。その他、イタリア語版 (Adelphi Edizioni) や英語版 (Penguin Books) も刊行された。

その後の研究の進展により、近年では、この物語には 1794、1804、1810 年版の少なくとも 3 つの異なる版が存在することが定説となっている。1794 年版は 1804 年に秘密出版される 10 年前の草稿で、一部しかない不完全なものである。1810 年版は、未完に終わった 1804 年版を構成も含めて大幅に書き換えたもので、物語は一応の完結を見ている。2004 年からベルギーで刊行された『ポトツキ全集』には、第 4 巻の 2 分冊¹¹をかけて 1804 年 (t. IV-2)、1810 年 (t. IV-1) の 2 つの版が掲載されている。2008 年には、フランスの GF Flammarion 文庫より同じく 2 分冊で出版された。もっとも、ポトツキは亡くなる直前まで原稿に手を加えていたとも言われており、今後更なる研究が進み、ポトツキが本当に描こうとした物語の全体像が明らかになる日が来るかもしれない。

日本語版としては、前述の国書刊行会『世界幻想文学大系 第 19 巻 サラゴサ手稿』(工藤幸雄訳、1980) がある。作家生前に発表された分にほぼ則った 14 日目までの抄訳であり、1958 年のフランス語版を基に、その前半 (198 ページ分) を訳したものである。翻訳作業にはポーランド語版

¹⁰ エドモンド・ホイェツキによる。ホイェツキは当時完全に近い原稿を所持していたと思われるが、その原稿は発見されておらず、翻訳を終えた後に原稿を破棄してしまったとも伝えられる。

¹¹ éd. François Rosset et Dominique Triaire, *Jean Potocki, Œuvres*, t.IV, 1-2, Peeters, Louvain, 2006

の詳細な注釈を参照し、ワルシャワ版豪華本に掲載されたイラストも使用している。原文に忠実でありながら、訳文自体が高い文学性を備えた名訳である。また、同じく工藤訳の 53 日目「トラルバの騎士分団長の物語」が、沼野充義編『東欧怪談集』（河出書房新社、1995）に掲載されている。工藤は生前に物語の全訳も完成させていた¹²が、長く東京創元社から発売されるという案内がされていたにもかかわらず、現在に至るまで出版はされていない。

III フィニーの画歴における『サラゴサ手稿』

ここで、大まかにではあるが、本挿画集『サラゴサ手稿』がフィニーの画歴全体の中にどう位置づけられるのかを押さえておきたい。

1. フィニーの挿画本制作

少女時代からゴシック・ロマンやドイツ・ロマン派の文学作品を耽読し、その後も 19 世紀フランスを代表する詩人シャルル・ボードレーユやアルチュール・ランボー、前掲したネルヴァルの手になる著作を絶えず読み返していた¹³というフィニーは、本作に限らず多くの挿画本を手がけている。2001 年に Favre 社から刊行された画集 *LEONOR FINI* には、フィニーの友人でもあった写真家オーヴァーストリート¹⁴による詳細な書誌と伝記も添えられているが、これによると、フィニーの自著となるもの¹⁵や他の画家との共作を除いても、65 冊（内 1 冊は没後刊行。同タイトルの別バージョンを含む）の挿画本が掲載されている。

主なものを挙げると、アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ『汚れた年月の中で』（1943 年）、マルキ・ド・サド『ジュリエット』（1944 年）、ジャン・ジュネ『囚人船』（1947 年）、エドガー・アラン・ポー『怪奇幻想集』（1952 年）、ネルヴァル『オーレリア』（1960 年）、ポーリーヌ・レアージュ『O嬢の物語¹⁶』（1962/1975 年）、ボードレーユ『悪の華』（1964 年）、ウィリアム・シェイクスピア『テンペスト』（1965 年）、ギュスターヴ・フローベール『聖アントワーヌの誘惑』（1966 年）、ガイウス・ペトロニウス『サテュリコン』（1970 年）などで、その多くが、性差やエロティシズム、生と死、オカルティズム、退廃や悪徳、両性具有・半神半獣、変身や分身などをテーマに、優美で寓意的な女性像や夢幻の世界を描いたフィニーの作風や資質を存分に活かせる作品群である。フィニーは、かつてインタビューで自身が挿画本を手がけた文学作品に共通する要素として「精神的に醒めていてリアリスト」「人間の心の働き、その美しさ、残酷さ、あるいは残酷な美しさそのもの」を挙げている

¹² 工藤幸雄「インタビュー『サラゴサ手稿』讀」『幻想文学』第 61 号、アトリエ OCTA、2001、p.112

¹³ 栗田亮「レオノール・フィニーとの対話」『芸術生活』25 巻 11 号（通号 279 号）、芸術生活社、1972、p.45

¹⁴ リチャード・オーヴァーストリート（1835-）。アメリカの写真家。美術史を学び 1968 年にパリに移住、ギャラリー・ミンスキーのキュレーターを務める。フィニーの友人でもあり、フィニーの著作『猫の鏡』（*Miroir des Chats*, La Guilde du Livre, Lausanne et Editions de la Différence, Paris, 1977）ではオーヴァーストリートが写真を担当、回顧展や本の刊行なども手がけている。1998 年に Leonor Fini Archives を設立、2020 年 5 月には監修を務めたフィニーのカタログ・レゾネが出版される。

¹⁵ フィニーは日本でも出版された *L'Onéiropompe*（邦題：夢先案内猫）、Editions de la Différence, Paris, 1978 をはじめ、多くの小説その他のテキストも手がけており、自作の挿画を付けて出版するなどしている。1945 年に発表した 2 か国語（フランス語で書き出し、途中イタリア語に変わるが再びフランス語に戻る）による小説は、作中人物が別の作中人物を呼び、一つの事件からまた別の事件が起こるといふ『サラゴサ手稿』を彷彿させるような複雑な構成となっている（『海外文化ニュース レオノール・フィニー』『みすず』通巻 204 号、みすず書房、1977、p.73）。

¹⁶ フィニーの仮装趣味は有名で、自身で制作した仮面をまとった写真も数多く残されているが、『O嬢の物語』の作者レアージュは、フィニーのアトリエで羽根や毛皮等から作られた仮面を見て、その仮面を『O嬢…』の最後の場面で主人公の頭にかぶせたという（宮川尚理「女性シュルレアリストの自己表現」『化粧文化』43 号、ポーラ文化研究所、2003、pp.121-123）。

17. もちろん、生涯に手がけた挿画本の全てが、必ずフィニーが好む要素を備えた原作によるものであるとは限らず、一方でオファーする側がフィニーの作風に適していると判断した原作を選んでいるとも言えるわけだが、これらの挿画本のラインナップを見ると、フィニーがかなり仕事を選んでいたのは確かであると思われる。

フィニーの挿画本制作は 1940 年代に始まり、60 年代から 70 年代にかけて特に多くの挿画本が刊行されている。『サラゴサ手稿』は、その 60 年代の初頭に出版された。

2. フィニーの画歴における『サラゴサ手稿』

1907 年にアルゼンチンのブエノスアイレスに生まれたフィニーは、幼くして母の故郷であったイタリア、トリエステに渡る。フィニーは幼少期から絵を描くことを好み、一日中絵を描いて過ごしていた。学校では立体図や遠近法などを教えられたが、いつも自己流、自分のイメージで描いており、動物の毛や毛穴、皺など、微細なものを描くことを好んだという¹⁸。その後本格的に画家を志したフィニーは、ミラノやドイツ、ミュンヘンを経て 1932 年頃からフランス、パリに定住する。程なくして、エルンストとの出会いを契機にシュルレアリストたちとの交流が始まる。既にミラノ時代にはジョルジオ・デ・キリコやカルロ・カッラらと出会い、作品を認められて展覧会にも出品するなどしていたが、パリではシュルレアリスムの精神的指導者であったブルトンをはじめ、詩人、小説家であり画家、美術評論家でもあるジャン・コクトーやマックス・ジャコブらと次々に知り合い、一日の多くを美術館で過ごした。この頃のフィニーは、骸骨や植物などのモチーフを艶のある画面に描いている。パリでの最初の個展の際にはエルンストがパンフレットに寄稿し、その後もエルンストや一時彼のパートナーとして生活を共にしていたレオノーラ・キャリントンらと親しく交流した。自由を重視し、規則や統治を嫌ったフィニーは、ブルトンとの折り合いの悪さ等もあって生涯シュルレアリスムのグループには属さず、後にグループからも距離を置くようになっていくが、シュルレアリストたちとの交流は長く続き、その作風、作品に描き出されるモチーフやイメージには、シュルレアリスムとの関わりが無視できないものがある。

1939 年にフランスが第 2 次大戦に参戦すると、シュルレアリスムの作家の多くが戦禍を避けてパリを後にした。フランスが宣戦布告をしたドイツの出身であったエルンストが捕らえられ強制収容所に送られる中、フィニーも南仏のサン＝マルタン＝ダルデッシュからアルカションへと国内を転々とし、モナコのモンテカルロ、イタリアのジェノヴァを経てローマに逃れると、しばらくローマに滞在することになる。この時期、フィニーは舞台や映画の美術・衣装を手がけるなど、活動の幅を広げている。前節でフィニーの挿画本制作は 1940 年代に始まったと述べたが、このローマ滞在時代に制作が開始されている。

時代により作風を大きく変化させたことで知られるフィニーは、戦後ローマからパリに戻った後の 1950 年代末、それまでの、筆跡を残さない艶のある画面に幻想的なイメージを緻密に描き出す「魔術的リアリズム」とも呼ばれる作風から、筆跡を残したざらざらとした肌合いで抽象的な形態を描く「鋳物の時代」と呼ばれる作風に変化し、その後 60 年代前半には明るく鮮やかな色彩で描く様式的・装飾的な画面へ、更に 70 年代後半には明るい色彩が消え、初期の暗い画面へと戻っていった。こうした作風の変化は主に油彩等に顕著に見られ、挿画や版画においては必ずしも油彩等と同様の経過を辿

¹⁷ 栗田亮「レオノール・フィニーとの対話」『芸術生活』25 卷 11 号（通号 279 号）、芸術生活社、1972、p.45

¹⁸ クリスチャン・ボラック、植木二葉 訳「レオノール・フィニーとの一時間」『海』12 卷 3 号（通巻 131 号）、中央公論社、1980、p.320

るわけではないが、挿画集『サラゴサ手稿』が出版され、他にも数多くの挿画本が刊行された 60～70 年代が、フィニーの画歴においてそうした時期であったということに言及しておく。

IV 挿画集『サラゴサ手稿』について

次に、当館が収集したフィニーによる挿画集『サラゴサ手稿』の内容について詳しく見ていく。

1. 基本情報

挿画集『サラゴサ手稿』の基本的な情報を、挿画本の前付や目次等により簡単にまとめると、以下のようになる。

出版元：La Compagnie des bibliophiles du livre d'art et de l'Amérique latine

(書誌愛好家協会 Société de Bibliophiles の一つ)

内 容：ヤン・ポトツキによる『サラゴサ手稿』から以下の 5 つの物語を選んで編集

「エミナとその妹ジベデの物語」「悪魔に憑かれたパシェコの物語」

「カバラ学者の物語」「ジュリオ・ロマティとモンテ・サレルノ公女の物語」

「レベッカの物語」 全 175 ページ

序 文：この挿画本のためにロジェ・カイヨワが刊行の前年の 1960 年に執筆

(内容はポトツキの生涯や原作の刊行の経緯等)

版数等：Daragnés 社¹⁹ (ダラニエ印刷所) により 1～150 のナンバーが付いた 150 部と、

ローマ数字の I～XXX が付いた 30 部をアルシュ紙に印刷

版 画：Georges Leblanc²⁰ (ジョルジュ・ルブラン) により印刷、

別に 30 部の挿画スイートをリーヴ紙に印刷

印 刷：1961 年 5 月 20 日、パリにて印刷

当館が収集したのは、挿画本が ed. 54/150、別刷りのサイン入りオリジナル版画 21 点が ed.V/XXX というセットである。エコノミストで芸術文化団体のメンバーでもあったジャン＝アンリ・アダム (1896-1979) のために刷られたもので、前付に記載された同氏の名前の下にはフィニーのサインが入っており、標題紙の前には氏の蔵書票も貼付されている。挿画本の中に、テキストとともに扉絵や挿絵として印刷された 21 点のエッチングは、物語の中で繰り広げられる、時に甘美な、時に悪夢のような場面を迷いのない流麗な線で表現したものであり、幻想的・官能的なフィニーの作風が物語の持つ独特の雰囲気高め、その世界を更に広がりのあるものにしている。別刷りのサイン入りオリジナル版画は、緑のスイート (Suite en Vert) として美しい緑色で刷られている。

なお、過去のオークションデータや古書店での販売情報等から赤 (サングイン) のスイートもあることが判明しているが、その他の色のスイートが存在するかは現時点で定かでない。また、アラビア数字のエディションの内、最初の 130 部は出版元の会員のために印刷されており、会員用の特装版の中には、別にサイン入りドローイングやリトグラフ (この挿画集出版のために特別に作られた夕食の

¹⁹ 画家、版画家、挿絵画家、装丁家のジャン・ガブリエル・ダラニエ (1886-1950) による出版社。

²⁰ ジャン＝シャルル・レモンにより 1793 年に創立された版画工房。

メニューに印刷されている) が付いたものもあるようだ。この辺りの情報を含め、本挿画集の出版の全体像については、今後詳細に調査する必要がある。

2. 本文テキスト

これまでに述べてきたとおり、この挿画本のテキストについては、60日を超える物語の内の10日余りの内容を、所々に省略を施しながら掲載したものである。特に、複数の物語が重層的に展開する部分に大きな省略が見られ、原作の構成の複雑さが軽減されている。目次には、前節に挙げた5つの物語の前に「サラゴサ手稿」と題した部分を加えた6章が掲載されているが、原作は1日毎に章が変わり、その中に様々な物語が複数入っていたり、章(日)をまたいで一つの物語が延々続いたりするため、挿画本のそれぞれの「物語」が原作の該当部と完全に一致するわけではない。挿画本のテキストと原作の比較については、稿末の「資料2:『サラゴサ手稿』テキスト比較」に詳細に記したが、前述のとおり原作にはいくつものバージョンがあるため、本挿画集にも序文を寄せているカイヨワの再発見により1958年に刊行されたフランス語版(Gallimard)を基本としながら、このバージョンの前半部分²¹を底本として工藤幸雄が訳した日本語版(『世界幻想文学大系 第19巻』)を比較に用いた。

巻頭の緒言が省略されたり、部分的に数行程度の省略がなされていたりする箇所はあるが、原作と大きく変わっているのは、やはり話中話の部分、つまり、登場人物の体験談の中で語られる人物が更に自身の生い立ちを語ったり、体験談の中で話者が読んだ本の内容が独立した物語として語られたりする部分が、大胆にカットされていることである。例えば、「悪魔に憑かれたパシェコの物語」の章において、主人公アルフォンスが語る身の上話(アルフォンス・ヴァン・ウォルデンの物語)の中では、自分が生まれる前の父の話、出生後の自身の話、そしてその話の展開の中で、父が神学者に読み上げさせたという2篇の幽霊話(ラヴェンナのトリヴルチオの物語及びフェララのランドルフォの物語)が略されている。また、同じ章の中で山賊の3兄弟の兄ゾトが登場するが、彼が語る自らの物語(ゾトの物語、ゾトの物語一つづきの1、ゾトの物語一つづきの2)は丸ごとカットされている。

最も多くの部分がカットされているのが「カバラ修験者の物語」の章の終盤で、アルフォンスが書庫で読んだ奇譚集の1篇(チボー・ド・ラ・ジェキエールの物語)と、その話中話として展開される主人公が出会った女性の身の上話(〈闇の岩〉城の令嬢ダリオレットの物語)、その翌日になってカバラ修験者が読み上げたギリシアの哲学者アポロニウスの伝記(リチアのメニペの物語)、帝政ローマ期の文筆家小プリニウスの書簡集の1篇(哲学者アテナゴラスの物語)、更にその翌日ジプシーの首長が語った自身の身の上話(ジプシーの酋長、パンデソウナの物語)の大部分と、かなり大幅に略されており、これらの省略により、次の章の冒頭に一部誰が語っているのかが曖昧な部分も生じている。最後の「レベッカの物語」では、絞首台で2人の死体に挟まれて眠っていたところをアルフォンスに助けられたレベッカが、自分の身の上について語る(レベッカの物語)のだが、挿画本はそのレベッカの話が終わったところで終了している一方、原作には、その話を聞いたアルフォンスが様々な考えを巡らせながら眠りにつくまでが記されている。

なお、「ジュリオ・ロマティとモンテ・サレルノ公女の物語」の章の最後から「レベッカの物語」の冒頭にかけての部分に、前後のテキストの内容や順序が訳文と異なる箇所が見られるが、本稿第II章

²¹ フランス語版の後半部分は、ポトツキの生前に発表されたアルフォンスの物語の続編に当たるアバドロの物語から、カイヨワが選んだいくつかの物語である。これらの内容については、ポトツキ研究者のクルスキが「発行者の手が入りすぎており、きわめて信を置きがたい」と考証している。(工藤幸雄「ヤン・ポトツキについて」『世界幻想文学体系 第19巻 サラゴサ手稿』、国書刊行会、1980、pp.318-319)

3 節の(1)で述べたとおり、1804 年から翌 05 年に出版された初版の内、1805 年の第 2 冊は 48 ページで中断されており、それがこの部分に当たる。訳文と一致しない部分のテキストは、1814 年版の『アルフォンスの 10 日間の物語』の一部と同じ内容となっている。

3. フィニーの挿画

フィニーの手になる挿画には、各章のタイトルページを飾る扉絵 6 点と、展開する物語の間に挿入される挿絵 15 点が含まれる。扉絵は比較的分かりやすいが、挿絵として入っている挿画については、どの場面を描いたものなのか定かではないものも多い。

以下に、挿画とその内容について示す。なお、各挿画の図表番号横または下に掲載している分類番号は、当館が収蔵作品全てに付している分野別通し番号である。

(1) 扉絵

各章のタイトルに添えられた扉絵は以下の 6 点である。

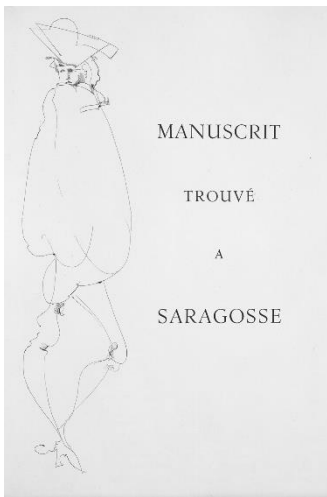


図 1 分類番号 P-2170
「サラゴサ手稿」扉絵
(アルフォンス)

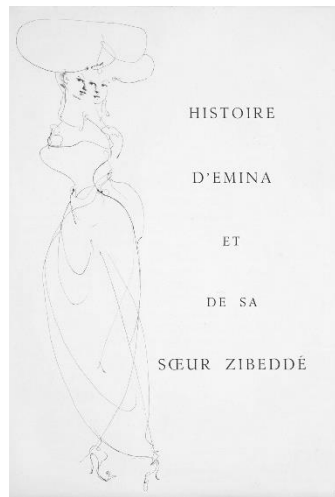


図 2 分類番号 P-2174
「エミナとその妹ジベデの物語」
扉絵 (エミナとジベデ)

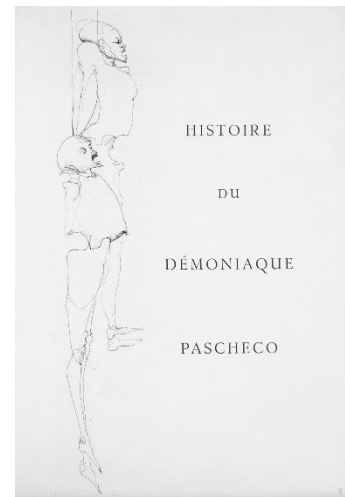


図 3 分類番号 P-2177
「悪魔に憑かれたパシェコの物語」
扉絵 (絞首台の 2 人)



図 4 分類番号 P-2182
「カバラ修験者の物語」扉絵
(美しい姉妹)

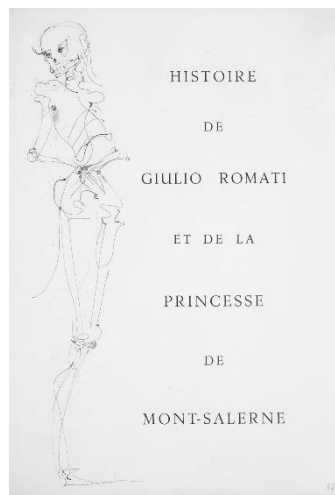


図 5 分類番号 P-2186
「ジュリオ・ロマティとモンテ・
サレルノ公女の物語」扉絵 (骸骨)

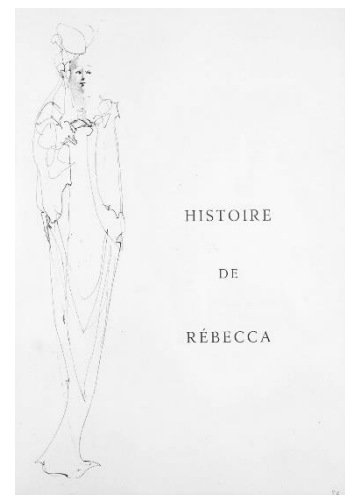


図 6 分類番号 P-2189
「レベッカの物語」扉絵
(レベッカ)

図 1、図 2、図 6 については、それぞれの章の主人公たちが描かれている。図 3 は、パシェコが

アルフォンス同様の体験を経て目覚めたときに、両脇に寝ていた絞首台の2人（ゾトの弟たち）である。図4はエミナとジベデの可能性もなくはないが、カバリストがソロモン王の唱句を研究しているときに鏡の中に映し出された、ソロモン王の双子の娘と見るのが妥当であろう。図5は、ロマティがモンテ・サレルノ公女の身の上話を聞いているときに、木箱の中から現れた6体の骸骨（公女の侍女たち）の内の1人だと思われる。もしくは、公女の本質を象徴的に表したものであろうか。

(2) 挿絵

次に、物語を彩る挿絵を章毎に見ていく。最初の章「サラゴサ手稿」に登場するのは3点である。

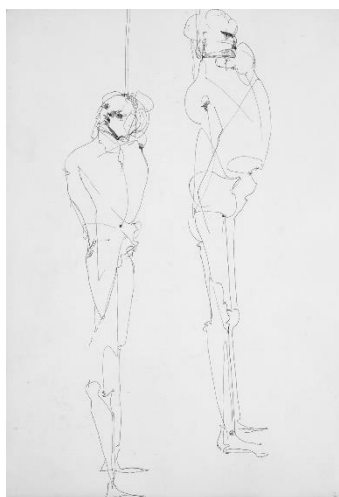


図7 分類番号 P-2171
挿絵1 (p.27)
(絞首台にかけられた兄弟)



図8 分類番号 P-2172
挿絵2 (p.33)
(アルフォンスと2人の姉妹)



図9 分類番号 P-2173
挿絵3 (p.37)
(横たわるアルフォンスと姉妹)

図7は、言うまでもなく縛り首となったゾトの弟たちである。従者を失い1人で旅を続けていたアルフォンスが、〈兄弟の谷〉で2人の死体が曝されているのを目にした場面である。図8は、アルフォンスがベンタ・ケマダの宿で出会った姉妹、エミナとジベデである。ベンタ・ケマダに宿を求めたアルフォンスのもとに黒人の女性が現れ、女主人が夕食に招待していると告げる。広間に入ると、そこには美しい姉妹が待っていた。物語全体の軸となる登場人物3人が初めて出会った場面である。その後2人の姉妹は魅惑的な踊りを披露し、理性を乱されたアルフォンスは気を失いそうになる。エミナはソファの隅にアルフォンスを座らせ、自身はその横に座り込む。ジベデも腰を下ろして寄りかかる。横たわるアルフォンスと彼に寄り添う姉妹を描いた図9は、この場面であろう。

続く「エミナとその妹ジベデの物語」の章では、以下の2点が描かれる。



図10
分類番号 P-2175
挿絵4 (p.51)
(姉妹と抱き合う
アルフォンス)



図11
分類番号 P-2176
挿絵5 (p.57)
(アルフォンスと
2人の骸骨)

図 10 は、2 人と抱き合い口づけを交わすアルフォンスである。朝が近づき姉妹の話が途切れた後、夢の中で 2 人と一夜を過ごす場面であろう。図 11 は、翌朝になって、アルフォンスが〈兄弟の谷〉で縛り首となっていた 2 人の死体の間で目を覚まし、死体と共に夜を過ごしたことを悟る場面である。

次の章「悪魔に憑かれたパシェコの物語」には、以下の 4 点の挿絵が添えられている。



図 12 分類番号 P-2178
挿絵 6 (p.73)
(幽霊を追い払うアルフォンス)



図 13 分類番号 P-2179
挿絵 7 (p.83)
(パシェコと女性か?)



図 14 分類番号 P-2180
挿絵 8 (p.91)
(飾りを手にするエミナとジベデ)

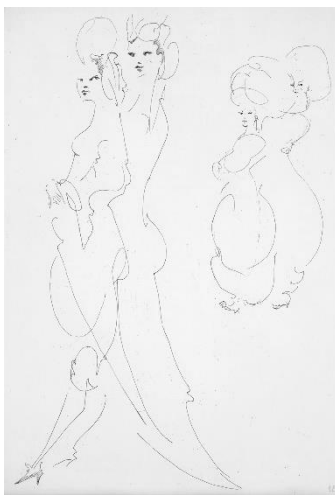


図 15 分類番号 P-2181
挿絵 9 (p.99)
(2 組の女性たち)

この辺りから、どの場面を描いているのか判断するのが難しくなってくる。図 12 は、礼拝堂で眠ることになったアルフォンスが、夜中に訪ねてきた 2 人の幽霊を剣で追い払った場面だと思われる。図 13 については、悪魔に乗り移られたというパシェコの身の上話において、彼がベンタ・ケマダで継母カミリヤとその妹イネリジャと愛し合うくだりがあり、その中の、パシェコがドアの鍵穴から覗く先で、カミリヤが身にまとっていた衣服を脱ぎ去る場面ではないかと思われたが、該当する本文は本挿画のかなり前（図 12 よりも前）に登場しており、どの場面を描いたものか定かでない。あるいはパシェコと思われる男性も、アルフォンスや他の男性という可能性もあろうか。

図 14 は、エミナとジベデの 2 人が、アルフォンスが身につけていた母親の形見の首飾りを奪い、

姉妹の毛髪で編んだ飾りを首にかけるよう告げる場面だと思われる。この後3人は愛を交わし、夜が明けるとアルフォンスはまたもや絞首台の下、縛り首になった兄弟の間で目を覚ますことになる。図15には、2組の女性たちが描かれている。直前に、パシェコが前夜目にしたエミナとジベデについて「美しい娘が二人、ムーアの服を着た女でした」と語る場面があり、2組はエミナとジベデ、カミリヤとイネリジャとも思えるが、前後に2組が登場するような該当場面はなく、誰を、そしてどの場面を描いているのかは不明である。

続く「カバラ修験者の物語」の章に描かれているのは、以下の3点である。

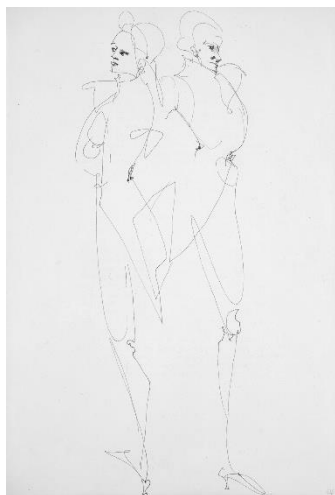


図 16 分類番号 P-2183
挿絵 10 (p.113)
(アルフォンスとカバラ修験者)



図 17 分類番号 P-2184
挿絵 11 (p.119)
(アルフォンスらを迎えるレベッカ)

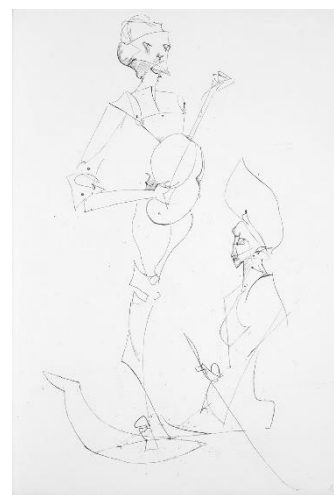


図 18 分類番号 P-2185
挿絵 12 (p.125)
(ジプシーの一团)

図16は、カバラ修験者が語る身の上話と体験談の合間に、言葉を交わすカバリストとアルフォンスと思われるが、カバリストとその父という可能性もある。修験者の話が終わった後、アルフォンスに告解を迫る修道僧やアルフォンスらは、修験者に誘われ彼の館に向かう。図17は、修験者の妹レベッカがアルフォンスら一行を出迎える場面であろう。図18は、修験者の館で一夜を過ごしたアルフォンスが、朝になってそれまでの出来事について考えを巡らせていたときに登場した、ジプシーの一团だと思われる。

「ジュリオ・ロマティとモンテ・サレルノ公女の物語」の章に掲載されているのは、以下の2点である。

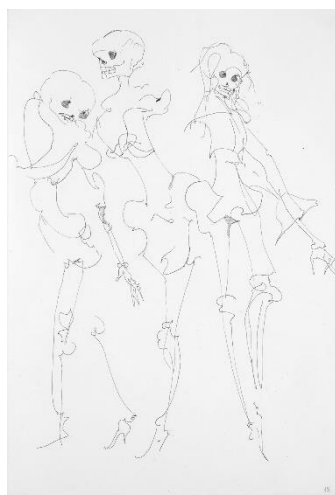


図 19
分類番号 P-2187
挿絵 13 (p.141)
(三体の骸骨)

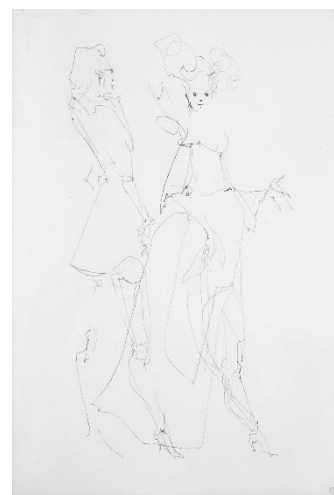


図 20
分類番号 P-2189
挿絵 14 (p.149)
(ロマティを案内する公女)

図19は、前項で示したこの章の扉絵(図5)と同様に、モンテ・サレルノ公女の侍女として登場

する6体の骸骨の内の3人である。ロマティが再三に渡り「天国」という言葉を使うと、公女はロマティに侍女たちを紹介すると告げて大きな木箱を開ける。途端に1体の骸骨が現れ出てロマティに襲いかかり、それから2体目、3体目と次々に骸骨が姿を現す。まもなく残りの3体も現れ、ロマティは公女に許しを乞う。ただし、この場面は本文では10ページ以上後に登場する。図20は、公女がロマティを伴い邸内を案内して回る場面か、もしくは「天国」と繰り返したロマティを地下室に連れて行く場面だと思われ、本文の該当箇所が近いのは後者であるが、いずれにしても図19よりも前の場面となる。両挿画の順序が入れ替わっているのではないかとも考えたが、いずれも本文と続きの見開きページに刷られているため、その可能性は考えにくい。

最後の「レベッカの物語」には、以下の挿画1点のみが添えられている。



図 21
分類番号 P-2190
挿絵 15 (p.167)
(鏡の中に双子を見るレベッカ)

最後の挿画は、レベッカの姿見の中に、運命の相手であるゼウスの双子の息子カストルとポルックスが姿を見せる場面である。カバラの修行中のレベッカは、兄の修験者に促されて外で力試しをすることになり、山頂で不思議な力を身につける。兄が鏡の中にソロモン王の双子の娘を見るようになった同じ頃、レベッカも半神半人の2人の姿を見る。後にレベッカもベンタ・ケマダに泊まることになり、そこに現れた2人の若者が、自分たちはカストルとポルックスだと名乗るのである。その後2人に連れ去られたレベッカであったが、聖なる名を唱えると解放される。絞首台の死体の間で眠っているところをアルフォンスに助け起こされ、物語の幕が閉じる。

以上見てきたように、フィニーの挿画が物語の中のどの場面を描いたか一目瞭然のものもあるが、現時点で誰を描いたものか、どの場面を描いたものかがはっきりしないものもあれば、掲載の順序に疑問が残るものもある。今後、本文テキストの時系列や細かい言い回し、挿画における登場人物の描き分けが分かるような表現のディテール等をもっと詳しく分析することで、フィニーがどの場面を、何を表現しようとしたのかを明らかにしていきたい。

V おわりに

フィニーの挿画集『サラゴサ手稿』について、原作の内容とその成立過程、フィニーの画歴における位置、挿画集及びそのテキスト・挿画の詳細と見てきた。冒頭に述べたように、本稿は基礎調査としてまとめたものであり、まだ調査や考察が不十分な点が多々ある。今後更なる調査が必要な点として、まずは本挿画集の出版の全体像が挙げられる。収集した時点では、150部の普及版と30部のオリジナル

版画付特装版があるという程度の理解であったが、その後の調査により、オリジナル版画の色のバージョンが複数存在することや、150部の内の130部が会員向けのもので、特装版にも様々な形態があること、挿画本自体のエディションとオリジナル版画のエディションが必ずしも一致せず、番号の若いエディションの挿画本により多くの付属品が付いているわけではないことなどが分かった。また、同年に同じ出版社の編集による84ページの書籍版『サラゴサ手稿』も出版されているので、これも含めて引き続き当時の出版状況の調査を行い、その全容の把握に努めたい。

また、フィニーの各挿画が表現しようとした内容についても、テキストや挿画を再度精査することにより、できる限り明らかにしていきたい。更には、フィニーが手がけた他の挿画本についても今後調査を進め、その中での表現の推移や本挿画集が全体に占める位置、ひいては挿画本制作の底に流れるフィニーのテーマや思想についての考察も試みたいと考えている。

参考文献等

ヤン・ポトツキ、紀田順一郎・荒俣宏 責任編集、工藤幸雄 訳『世界幻想文学大系 第19巻 サラゴサ手稿』、国書刊行会、1980

Alphonse Van Worden manuscript trouvé à Saragosse [épreuves d'imprimerie], 1804-1805 (Premier Decameron)

M.L.C.J.P, *Avadoro, histoire espagnole*, t. I -IV, Gide fils, 1813

Dix journées de la vie d'Alphonse Van-Worden, t. I -III, Gide fils, 1814

ヤン・ポトツキ、工藤幸雄 訳「『サラゴサ手稿』第五十三日 ^{コマンドール}トラルバの騎士分団長の物語」、沼野充義 編『東欧怪談集』、河出書房新社、1995、pp.11-26

Roger Caillois, Préface de Roger Caillois, *Manuscrit Trouvé à Saragosse*, La Compagnie des bibliophiles du livre d'art et de l'Amérique Latine, 1961, pp.11-19

ツヴェタン・トドロフ、三好郁朗 訳『幻想文学論序説』、東京創元社、1999

工藤幸雄「インタビュー『サラゴサ手稿』讃」『幻想文学』第61号、アトリエ OCTA、2001、pp.112-115

畑浩一郎「『サラゴサ草稿』研究序説」『仏語仏文学研究』43号、東京大学仏語仏文学研究会、2011、pp.15-39

畑浩一郎「ヤン・ポトツキ『サラゴサ草稿』における語りの中断について」『聖心女子大学論叢』第128集、聖心女子大学、2017、pp.276-253

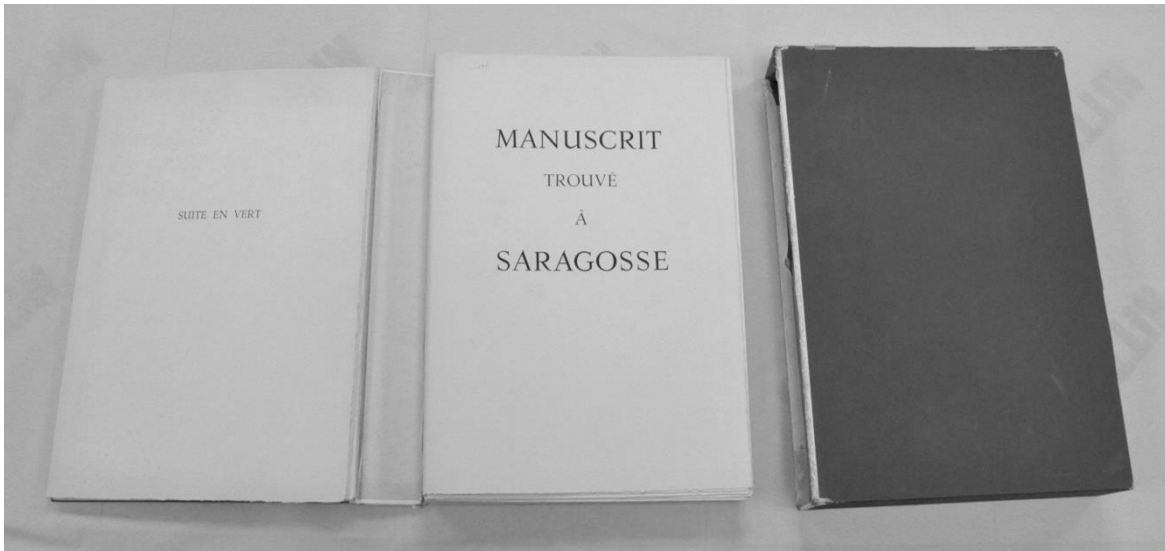
北垣潔「『サラゴサ草稿』考(1)－知の伝達の物語－」『青山フランス文学論集』復刊9号、青山学院大学フランス文学会、2000、pp.121-132

北垣潔「『サラゴサ草稿』考(2)－アルフォンスの変貌－」『青山フランス文学論集』復刊10号、青山学院大学フランス文学会、2001、pp.5-15

清水徹「教養小説風の力学をもった幻想小説 ヤン・ポトツキ 工藤幸雄訳『サラゴサ手稿』」『海』13号1巻(通巻141号)、中央公論社、1981、pp.262-263

- 間瀬玲子「ネルヴァルとポトツキの神秘思想」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』3号、筑紫女学園大学、2008、pp.51-61
- Richard Overstreet, Bibliographie et Notes Biographiques, *LEONOR FINI*, Favre, 2001, pp.169-175
- Galleria Civica d'Arte Moderna, Palazzo dei Diamanti, *LEONOR FINI*, Grafis, 1983
- Leonor Fini, *LEONOR FINI Peintures*, Éditions Michèle Trinckvel, 1994
- 栗田亮「レオノール・フィニィとの対話」『芸術生活』25巻11号(通号279号)、芸術生活社、1972、pp.44-46
- クリスチャン・ポラック、植木二葉 訳「レオノール・フィニーとの一時間」『海』12巻3号(通巻131号)、中央公論社、1980、pp.318-328
- 「風のたより レオノール・フィニの幻想小説ほか」『文芸』17巻9号、河出書房新社、1978、p.351
- 「海外文化ニュース レオノール・フィニ」『みすず』19巻2号(通巻204号)、みすず書房、1977、pp.72-76
- 尾形希和子『レオノール・フィニー—境界を侵犯する新しい種』、東信堂、2006
- 『現代美術 第8巻 フィニ』講談社、1993
- Bunkamura ザ・ミュージアム『レオノール・フィニ展』、アートプランニングレイ、2005
- 北海道立近代美術館『フィニー展』、アート・ライフ、1985
- 村木明「レオノール・フィニの最新銅版画 女の妖怪性とアナロジー」『版画芸術』5巻19号、阿部出版、1977、pp.137-139
- 宮川尚理「女性シュルレアリストの自己表現—ヴァランティエヌ・ユゴーとレオノール・フィニーの場合」『化粧文化』第43号、ポーラ文化研究所、2003、pp.116-123
- A.P.ド・マンディアルグ、生田耕作 訳『レオノール・フィニーの仮面』、奢瀨都館、1993
- 澁澤龍彦「人工楽園の渉獵者たち—1 レオノール・フィニー 魔女から女祭司まで」『みづゑ』762号、美術出版社、1968、pp.62-77
- 澁澤龍彦「幻想の画廊から 卵・仮面・スフィンクス レオノール・フィニーの世界」『澁澤龍彦全集』8、河出書房新社、1994、pp.312-319
- コンスタンタン・ジェレンスキ、澁澤龍彦 訳「レオノール・フィニー」『澁澤龍彦翻訳全集 14巻』、河出書房新社、1997、pp.35-65
- 瀧口修造「レオノール・フィニ」『みづゑ』562号、美術出版社、1952、pp.46-48
- 巖谷國士「スフィンクス・女の謎」『芸術生活』25巻11号(通号279号)、芸術生活社、1972、pp.35-39
- 藤田尊潮『画家は語る 20世紀の巨匠たち 奇跡のインタビュー』、八坂書房、2006、pp.197-202
- アンドレ・ブルトン、巖谷國士 訳『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』、岩波書店、1992

挿画集『サラゴサ手稿』詳細



Manuscrit Trouvé à Saragosse / サラゴサ手稿

著者：Jean Potocki

版画：Leonor Fini（印刷 Georges Leblanc）

編集：La Compagnie des bibliophiles du livre d'art et de l'Amérique Latine

序文：Roger Caillois

出版：1961年5月20日

判型：38×25.5cm フォリオ（2つ折り版）

版数：180部（1～150、I～XXX）、別刷り30部

エディション 挿画本 54/150、オリジナル版画 V/XXX

印刷：L'Imprimerie Daragnès

形態：背革綴じ、赤い差し込み式紙函入（函サイズ 39.0×26.6×5.8 cm）

サイン入りオリジナル版画 21点付属（Suite en Vert）

目次：Préface de Roger Caillois	11
ロジェ・カイヨワによる序文	
Manuscrit trouvé à Saragosse	21
サラゴサ手稿	
Histoire d'Emina et de sa sœur Zibeddé	43
エミナとその妹ジベデの物語	
Histoire du démoniaque Pacheco	63
悪魔に憑かれたパシェコの物語	
Histoire du cabaliste	107
カバラ修験者の物語	
Histoire de Giulio Romati et de la Princesse de Mont-Salerne	131
ジュリオ・ロマティとモンテ・サレルノ公女の物語	
Histoire de Rebecca	157
レベッカの物語	

挿画詳細

挿画	分類番号	図版番号	イメージサイズ	ペーパーサイズ	エディション	サイン位置
1	P-2149	—	34.2×8.3	37.9×25.4	V/X X X	右下
	P-2170	図1	34.2×8.3	37.9×50.9 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
2	P-2150	—	37.8×15.9	37.9×25.4	V/X X X	左下
	P-2171	図7	37.8×15.9	37.9×51.1 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
3	P-2151	—	37.1×25.1	37.9×25.4	V/X X X	左下
	P-2172	図8	37.1×25.1	37.9×51.1 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
4	P-2152	—	32.4×21.9	37.9×25.4	V/X X X	左下
	P-2173	図9	32.4×21.9	37.9×50.9 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
5	P-2153	—	35.9×11.3	37.9×25.4	V/X X X	右下
	P-2174	図2	35.9×10.9	37.9×51.0 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
6	P-2154	—	30.8×20.5	37.9×25.4	V/X X X	右下
	P-2175	図10	30.8×20.5	37.9×51.3 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
7	P-2155	—	29.4×22.1	37.9×25.4	V/X X X	左下
	P-2176	図11	29.4×22.1	37.9×51.3 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
8	P-2156	—	36.8×6.5	37.9×25.4	V/X X X	右下
	P-2177	図3	36.8×6.5	37.9×51.3 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
9	P-2157	—	33.8×23.3	37.9×25.4	V/X X X	左下
	P-2178	図12	33.8×23.3	37.9×51.2 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
10	P-2158	—	37.8×24.4	37.9×25.4	V/X X X	左下
	P-2179	図13	37.8×24.4	38.0×51.3 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
11	P-2159	—	34.9×23.0	37.9×25.4	V/X X X	左下
	P-2180	図14	34.9×22.5	38.0×51.2 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
12	P-2160	—	36.4×23.9	37.9×25.4	V/X X X	右下
	P-2181	図15	36.4×23.9	37.8×51.3 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
13	P-2161	—	37.0×12.2	37.9×25.4	V/X X X	右下
	P-2182	図4	37.0×12.2	38.0×51.3 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
14	P-2162	—	36.9×15.1	37.9×25.4	V/X X X	左下
	P-2183	図16	36.9×15.1	38.0×51.3 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
15	P-2163	—	37.0×25.3	37.9×25.4	V/X X X	中下
	P-2184	図17	37.0×25.3	38.0×51.3 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
16	P-2164	—	36.6×19.6	37.9×25.4	V/X X X	左下
	P-2185	図18	36.6×19.6	38.0×51.4 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
17	P-2165	—	35.3×8.9	37.9×25.4	V/X X X	中下
	P-2186	図5	35.3×8.9	38.0×51.2 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
18	P-2166	—	32.7×25.0	37.9×25.4	V/X X X	左下
	P-2187	図19	32.7×25.0	37.9×51.2 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
19	P-2167	—	32.4×17.5	37.9×25.4	V/X X X	左下
	P-2188	図20	32.4×17.5	37.9×51.2 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
20	P-2168	—	34.4×7.1	37.9×25.4	V/X X X	中下
	P-2189	図6	34.4×7.1	38.0×51.1 (2つ折)	54/150	挿画本の前付
21	P-2169	—	36.5×24.9	37.9×25.4	V/X X X	左下
	P-2190	図21	36.5×24.9	38.1×51.3 (2つ折)	54/150	挿画本の前付

※ P-2149～2169はオリジナル版画、P-2170～2190は挿画本の図版。

同じ挿画でイメージサイズが異なるものがあるのは、刷りの傾きやかすれ等による。

資料 1：『サラゴサ手稿』梗概

『サラゴサ手稿』は、サラゴサ包圍戦に加わったフランス兵が、ある小館で見つけたスペイン語の手稿をフランス語に翻訳したもの。以下がその内容である。

【1日目】

スペインのシエラ・モレナ山中を旅していた騎士アルフォンスは、二人の従者を相次いで失い、一人で旅を続ける。途上、山賊の三兄弟に由来する〈兄弟の谷〉という名前の谷にさしかかると、三兄弟の兄ゾトを除く弟二人が縛り首となり、今もその死体が曝されているのを目にする。慄然としてその場を離れ、山道を通って次の谷へと入ると、ベンタ・ケマダという廃墟のような一軒の宿屋にたどり着く。それは、悪魔に乗っ取られたという止宿禁物の宿であった。名誉・面目を守り、臆病の振る舞いのあるまじきことを心がけとして育ったアルフォンスは、戒めに逆らいその宿に宿泊することを決意する。

真夜中になると黒人の女性が部屋に現れ、自らが召使いとして仕えている貴婦人が夕食に招待していると告げる。空腹に耐えかねていたアルフォンスが広間に入ると、三人分の食事が用意されており、イスラム教徒の美しい姉妹－姉エミナ、妹ジベデーが現れる。二人はアルフォンスに自分たちは同じ一族だと語り、自分たちの身の上話や先祖の話始める（**エミナとその妹ジベデーの物語／カサル・ゴメレスの物語**）。

朝が近づくと話は途切れ、エミナの誘いに応じてアルフォンスは夢の中で従妹たちと一夜を過ごす。

【2日目】

目が覚めると、そこは〈兄弟の谷〉であった。宿で美しい姉妹と過ごしたはずのアルフォンスは、絞首台の真下で、縛り首となっていた二人の亡骸に挟まれて眠っていた。昨夜のことを思い返し、シエラ・モレナ越えをする決意をしたアルフォンスは、宿に戻って馬を駆り、旅を続けた。

その夜の宿を求めて馬を進めたアルフォンスは、ゴシック風の礼拝堂の側にある僧庵にたどり着く。修道僧に迎え入れられ食事をしていると、この世のものとは思えない形相の若者、悪魔に乗り移られたというパシェコが現れる。僧に促され、パシェコは自らの身の上を語る（**悪魔に憑かれたパシェコの物語**）。

パシェコはアルフォンスと似たような旅を経て、同じベンタ・ケマダの宿で継母とその妹の二人と一夜を過ごす。そして翌日目が覚めると、絞首台の下で二人の死体の間に寝ていたのであった。その日は別の宿に泊まり、夜になると再び継母と妹が現れるが、暖炉の火に照らされたのは、縛り首となった二人の死体であった。男たちから命からがら逃げたパシェコは、行き倒れているところを礼拝堂に連れてこられたという。

礼拝堂で眠ることになったアルフォンスは、訪ねてきた二人の幽霊を追い払う。

【3日目】

無事に目覚めたアルフォンスは、修道僧に言われるまま身の上話を始める（**アルフォンス・ヴァン・ウォルデンの物語**）。

自らの出生前の父の話から出生後の話へと展開する話の中で、父が神学者に読み上げさせた、父の曾祖父が書いたという幽霊話の中的一篇が語られる（**ラヴェンナのトリヴルチオの物語**）。

美男で金持ちのトリヴルチオはある女性に愛を告げるが、他の男性を愛していると断られる。トリヴルチオは教会で婚姻の告示を受ける二人の命を奪って逃げ、その後悔恨の念を胸に舞い戻って二人の墓がある教会へと出入りするようになる。ある晩教会の外で寝ていると、墓で眠っていた死者たちが一斉に現れ、婚姻の告示が申し渡される。

翌日、再び父は物語の一篇を読み上げさせる（**フェララのランドルフォの物語**）。

極道のランドルフォは、強欲で放埒なピアンカを母と妹の元に連れてくる。母が嫌がらせをされたことを知った叔父は腹を立て、ピアンカを人に殺させる。ランドルフォは怒りの矛先を求めて母の元を再び訪れるが、そこにピアンカの幽霊が現れる。幽霊は食卓にあったものを平らげると、ランドルフォにベッドで待っているよう告げる。

18歳になったアルフォンスは入隊することになり、父から代々の秘密であるという剣法の秘術を授かる。その後、話は現在の旅へと続き、途中で二人の従者を失ったこと、ベンタ・ケマダに泊まったことを語る。

修道僧はアルフォンスが首吊り男の死霊に取り憑かれてパシェコのような目にあつたのではないかと問うが、アルフォンスは否定する。礼拝堂を出て旅を続けたアルフォンスは、異端審問所に逮捕されて土牢に入れられる。

【4日目】

審問の僧は、アルフォンスの前に後ろ手に縛り上げられた従妹の姉妹を連れてくる。アルフォンスは姉妹の前で拷問を受けることになるが、銃声とともにゾトと手下たちが入ってくる。ゾトに助けられた三人は大岩の陰の岩場で落ち合う。

【5日目】

ゾトに連れられて廃墟となった村に辿り着いたアルフォンスは、井戸の入口からゾトの住む洞窟に入る。絞首台で亡くなっていた筈の弟二人も姿を現した。三兄弟は、アルフォンスの母方のゴメレス家の部下として、今後アルフォンスに献身を尽くすという。ゾトは、エミナに言われて自らの物語を語る（ゾトの物語）。

ゾトの父親は、妻がその妹と張り合うために必要な金を手にするため、人殺しに手を染めることになる。老領主に肘掛椅子に縛りつけた妻を殺すよう依頼されたのを首切り役人の真似はしないと断ったこと、更に土地の名門である伯爵と侯爵に同時に互いを殺すよう依頼された際、両方を遂行したことで、父親の名声は広がった。

話は一旦中断し、一同は眠りにつく。その夜、二人の姉妹はアルフォンスの寝所を訪れ、再び三人で一夜を過ごす。

【6日目】

ゾトの物語が続く（ゾトの物語—つづきの1）。

悪事に手を染めていた父親が怪我をして一線を退き、妻やゾトら三兄弟とは離れた場所で暮らしている間に、妻が急死する。ゾトらは父親が匿ってもらっていた僧院で生活することになった。そこで8歳のゾトは同じ年代の裕福な少年プリンチピノに屈辱的な仕打ちを受け、復讐を誓う。その後煙突掃除の仕事をするようになったゾトは、半年程して少年への復讐を遂げる。

その話を聞いた父親は、息子も盗賊になる人間だと考え、密貿易や海賊をしていた鉄甲船の船長にゾトを預ける。ゾトは父や弟たちと別れ、船長の下で貨幣の運搬等を行うが、その荒稼ぎが嫉妬を呼び、ナポリ国王からの勅命で差し向けられた艦隊に襲われ、船長は命を落とす。一旦は捕らえられるも若年ということで放免となったゾトは、僧院に戻る。しかし父は既に亡くなっており、弟たちもイスパニア船の水夫見習いとなり、僧院を出ていた。ゾトは農園へと送られ、そこで15の歳まで生活した。

再び話は中断され、アルフォンスらはそれぞれの寝所に戻るが、夜中にはまた二人の姉妹が現れる。

【7日目】

ゾトの物語が続く（ゾトの物語—つづきの2）。

ある日、かつての父の部下たちが身を置いている一党が農園に乗り込んできた。ゾトは部下たちの計らいで一味に加わり、やがて副頭目として勇名をとどろかせるようになる。ゾトが18歳のとき、一味は火山の噴火を避け、かつての仇敵であったプリンチピノの領地に移動する。仲間と共に彼の館に狼藉を働くうち、プリンチピノが貴族の女性たちや軍隊を伴ってやってきた。一行の中に美しい娘シルヴィアを見つけたゾトは心を奪われるが、彼女はプリンチピノの婚約者であった。結婚を拒むシルヴィアをプリンチピノの元から奪うと、元の土地に戻り、溶岩流が作り出した隠れ家に仲間たち共々住まわせた。そこに弟たちも加わり、幸せな日々が続いた。

しかし、1年もしないうちに仲間の若者がシルヴィアに懸想し、プリンチピノに雇われていた他の仲間の裏切りもあって、ゾトは心変わりを感じたシルヴィアとその若者を手にかけてしまう。ゾトはプリンチピノをあの手で送った。まもなくゾトは仲間らの信頼を失い、一党はばらばらになる。弟たちに説得されたゾトは十数名の手下たちとイスパニアに渡り、シエラ・モレナに辿り着いた。悪事を重ねながらも岩屋に隠れて捕まることはなく、羊飼いの男二人がゾトの弟の代わりに縛り首になった。二人は身代わりにされたことを恨み、夜な夜な絞首台から出て人を騒がせているという。

その夜、姉妹はいつもより早めにアルフォンスの元を訪れ、彼が身につけている母親の形見の首飾りを奪い、姉妹の毛髪で編んだ飾りを首にかけるように言う。彼は二人に従い、愛を交わした。夜中になるとゴメレス家の長老が現れ、アルフォンスにイスラムへの改宗もしくは死をせまる。自ら死を遂げる覚悟をしたアルフォンスは、長老に渡された盃を一気に飲み干し、意識を失った。

【8日目】

目を覚ますと、アルフォンスは例の絞首台の下におり、隣には縛り首になった二人が横たわっていた。その向こうに倒れていたカバラの修験者を起こし、二人で絞首台を出てベンタ・ケマダの宿に向かう。そこで、前夜に姉妹に奪われ岩の割れ目に落ちた首飾りを見つけたアルフォンスは、自分が実はこの宿から出ておらず、修道僧やゾトの弟たちも幻に過ぎないのではと考え始

める。

その後二人は僧庵に向かい、途中で出くわした修道僧とともに到着すると、そこには断末魔のようなパシエコが横になっていた。修道僧に促されてパシエコは昨夜自分の身に起こったことを語る（**パシエコの話**）。

パシエコは呪われた山羊に追われ、背に乗せられて岩屋の奥に辿り着き、アルフォンスと姉妹の姿を見た。姉妹はアルフォンスの首飾りを奪うと首吊り男たちに姿を変えるが、アルフォンスはそれに気づかず夜を過ごす。夜中に悪魔がやってきて改宗しなければ殺すとアルフォンスを脅し、パシエコはアルフォンスに合図を送るが首吊り男たちに襲われ、僧庵の前で意識を失って倒れている所を修道僧に助けられた。

修道僧はアルフォンスに懺悔を迫るが、アルフォンスは自分が見たものとは異なるため、同じベンタ・ケマダの宿に泊まったというカバラ修験者の話を聞くことを提案する。アルフォンスは再び礼拝堂に宿泊することになる。夜中に戸をたたく音と山羊の鳴き声が聞こえるが、アルフォンスの一喝で静まった。

【9日目】

朝食をとっていると異様な風体の男が現れ、これから行く先で重大な手紙を受け取るようアルフォンスに告げる。カバラ修験者は精霊を使って手紙をこの場に届けさせる。異端審問所に対するアルフォンスの不埒な振る舞いを理由に、カスティリャに立ち入ってはならないと告げるものであった。

カバラ修験者はベンタ・ケマダでの一件を話し始める（**カバラ修験者の物語**）。

占星術師でカバラにも造詣の深い父から妹とともにカバラの手ほどきを受けた修験者は、日に日に知識と能力を身につけていった。父親は、修験者にはソロモン王の双子の娘、妹にはゼウスの双子の息子との結婚を運命づけてあると告げてその生を終える。数年後、修験者がソロモン王の雅歌の唱句の研究を始めると、1行、2行と書き上げていく度、鏡の中にソロモン王の双子の娘の足が少しずつ現れるようになる。

今年になってコルドバに有名な導師が来ると聞き、会いにいかうとするが、その日はベンタ・ケマダまでしか行けず、そこに宿泊することにした。夜中になると小さな精霊が現れ、修験者が仕事を逆から始めたために双子の娘は足から現れた、終わりの方の唱句から始めるようにと告げる。それに従い最後の唱句に取りかかると、娘たちの名はエミナとジベデと分かった。その後預言者が二人の娘を連れて現れ、修験者の首には二人の毛髪を編んだ組紐がかけられる。二人と一夜を過ごした修験者だったが、翌朝目が覚めると絞首台の下にいた。

カバラ修験者に誘われ、一行は修験者の館に到着する。夜になって眠り込んでいると、アルフォンスのもとに修験者の妹レベッカが現れる。レベッカは、兄とともに二人の女の悪霊の正体を突き止めようと呪術をかけたがうまくいかないことを告げ、アルフォンスが知っていることを全て教えてほしいと求める。アルフォンスが断ると、レベッカはまた翌晩に訪れると言って出て行った。

【10日目】

テラスで朝の空気を吸い込んだアルフォンスは、これまでの出来事を思い返す。妖怪変化を原因としない説明を考えていると、遠くからジブシーの一団がやって来て近くに小さな天幕を張った。首長のテントを眺めていると、中から従妹たちが現れた。仲間たちと一緒に踊るその姿に、アルフォンスは嘲笑するような様子を見た。地下室に降りて近くで見ると、従妹たちと見えたのは誤りだった。しかしテラスに引き返してから再度見ると、そこに従妹たちの姿が見え、二人は笑いながら天幕に入っていった。美しい二人が様々に姿を変えて人間を慰み者にし、首吊り男たちの体に移り移って悪行を働いていると考え、アルフォンスの憤懣は爆発する。彼は書庫に入り、机上にあった奇譚集の一篇を読み始める（**チボー・ド・ラ・ジャキエールの物語**）。

不品行で有名なチボーは、ある夜若い女性に出会い、家まで送っていくことになる。道すがら、彼女の身の上話（**闇の岩城の令嬢ダリオレットの物語**）を聞いていくと、チボーの隣に住んでいる貴公子の妻になる女性だと分かった。彼女を抱きかかえて寝椅子に横たえた瞬間、鋭い鉤爪が背中に食い込む。怪物に姿を変えた彼女に襲われたチボーは、ついには命を落としてしまう。

アルフォンスは、やはり悪魔が首吊り男の体に移り移り、自分はチボーの二の舞を演じたのだと確信する。その夜、アルフォンスはレベッカを待っていたが、彼女は姿を現さなかった。

【11日目】

アルフォンスはレベッカに起こされて目を覚ます。

食事の席で、カバラ修験者はギリシアの哲学者アポロニウスの伝記を書いたフィロストラトゥスの著作集を読み上げる（**リチアのメニペの物語**）。

才に長け見目麗しい若者メニペは、美しい女性に出会い、誘われるままその家に向かう。アポロニウスは、女性は幽鬼で立派な家や調度は全て実体がなく、人肉を求めて快樂を餌にメニペを誘ったのだと語る。幽鬼は正体を明かし、メニペを食べるため殺したことを白状する。

次に、プリニウスの書簡集を読み上げる（**哲学者アテナゴラスの物語**）。

哲学者アテナゴラスは幽霊屋敷となっていた屋敷を購入する。夜になると幽霊が現れ、庭に出ると忽然と消えた。翌日その場所を掘ると白骨が発見され、きちんと埋葬すると幽霊は現れなくなった。

席を立ったアルフォンスは、テラスで例の二人のジプシー娘を見つける。従妹たちに見えたため、アルフォンスは地下室に降りて鉄格子を開け、急流を向こう岸に渡る。目と鼻の先で見た二人はやはりエミナたちではなかった。二人はアルフォンスの手相を見て悪魔ばかりにもてると言う。二人に連れられて宿営地に行くと、アルフォンスは彼女たちの父親だという老首長に引き合わされた。カバラ修験者の態度が鼻についていたアルフォンスは、首長の申し出によりそこに滞在することになり、首長のテントに泊まる。夜中近く、何かの気配で目を覚ますと、両側から誰かがアルフォンスの体にすり寄ってきた。また首吊り男たちの間で目を覚ますのかと思ったアルフォンスだったが、それは二人のジプシーの女性だった。

【12日目】

無事目を覚ましたアルフォンスは、首長に促されてジプシーたちの一団に加わり、驛馬に乗って出発する。山の高みに着くと無数の荷物があり、首長は税関を買収して商売をしていると語る。アルフォンスにせがまれ、首長は自身の話を語る（**ジプシーの酋長、パンデソウナの物語**）。

首長の話の中で、旅の道すがら宿で出会った男ジュリオ・ロマティによる不思議な体験談が語られる（**ジュリオ・ロマティの物語**）。

ロマティは旅の途中、山賊ゾトの難を逃れようと思案にくれていた。そこにゾト本人が現れ、邪魔はしないと行ってロマティに赤い羽根飾りを渡す。

アルフォンスがゾトを知っていると告げると、首長はゾト兄弟も自分と同様ゴメレス家に仕える身だと語る。話は中断するが、アルフォンスは首長までもが自分に関係することに驚き、自分の身に起こっていることの裏で、どんな強大な組織が動いているのかと考えをめぐらせる。

その夜は誰と過ごすこともなく終わった。

【13日目】

翌朝、税関の監視員が近づいて来ていることから、一団はその場を発ち、次第にシエラ・モレナの奥深くに入っていく。奥まった谷に到着すると、アルフォンスは首長に話の続きを求め（**パンデソウナの物語—つづきの1**）、ジュリオ・ロマティの話が再開される（**続ジュリオ・ロマティの物語—つづきの1**）。

ロマティが旅を続けていると、山の上にそびえる広大な城に気づく。城は無人で荒れ果てているが、構内に礼拝堂と僧庵があり聖職者数人が住んでいるという。そのうち夕立に襲われ、近くの落雷で驛馬から放り出されたロマティは、一人小さな洞穴にたどり着く。小降りになると、従者を連れた若者が近づいてきてモンテ・サレルノ公女の使いだと告げ、公女の館へとロマティを案内する。公女本人だと思われる貴婦人が接待役と称してロマティを迎え、館の中を案内する。様々な立派な調度や絵画に感心したロマティが天国のようだと口にすると、女性はそれを咎める。食事の用意が出来た部屋に入ると、公女は自身の身の上話を始める（**モンテ・サレルノ公女の物語**）。

話の途中、ロマティが公女の反応が見たくて再び天国という言葉に口にすると、公女は侍女たちを紹介すると告げ、大きな木箱を開ける。中から骸骨が現れ、自分の骨を剣にして次々とロマティに襲いかかる。許しを乞うと、公女は口外しないようにロマティに命じ、その腕をつかむ。気を失ったロマティの腕には、5本の指の跡が火傷になって残った。

話が終わり、アルフォンスが山歩きに出ると、遠くにゾトの兄弟の絞首台らしきものが見えた。近づいて見ると、二つの死体がぶら下がっていた。戻ったアルフォンスに、首長は死体がぶら下がっていたかを確認し、夜中を過ぎると死体が下がっていないことが始終あると語った。

【14日目】

アルフォンスが再び絞首台に行ってみると、二つの死体は地面に横たわっており、その間にレベッカが寝ているのが見えた。助け起こしたアルフォンスに、レベッカは自身の話を語る（**レベッカの物語**）。

兄の修験者が鏡の中に双子の娘を見るようになった頃、レベッカも姿見の中にゼウスの双子の息子と思しき半神半人の二人を見た。その後、兄は有名な導師に会おうと出かけ、ベンタ・ケマダにたどり着く。兄はそこで一夜を過ごした後アルフォンスを連れて戻り、レベッカに自分の体験やパシェコの話をする。悪魔の正体が分からず、アルフォンスも何も語らないため、レベッカは自分でベンタ・ケマダに泊まってみる決心をした。部屋に入ると、背の高い若者が二人おり、食事をしながら歌っていた。半神半人の二人にそっくりだと思われたとき、二人は自分たちが双子でカストルとボルックスだと告げる。レベッカは二人に空中高く連れ去られるが、兄とレベッカだけが唱えることができる聖なる名を唱えると、真逆さまに地上に落ち、気がつくとアルフォンスに呼び起こされていた。

アルフォンスは、レベッカの話はでたらめで、ゴメレス家の連中とグルになってイスラム教に改宗させようとしているか、他の動機から従妹たちの秘密を探り出そうとしているのではないか、あるいは従妹たちが悪魔でないとするれば、やはりゴメレス家の回し者ではないかと考える。レベッカが兄と共に戻っていき、天幕に戻ったアルフォンスは更に考えを巡らせるが、何も結論が見つからないまま眠りについた。

資料 2：『サラゴサ手稿』 テキスト比較

[挿画本]

(緒言部分は略され、手稿の内容から物語が始まる)

【サラゴサ手稿】

p.21 扉絵 (アルフォンス)

pp.23-26

スペインの峻険な連山シエラ・モレナの山中には、山賊などが潜み住み、立ち入った旅人は百千の恐怖に脅かされると語り伝えられていた。マドリッドへと向かうため、この誰も入ることのないシエラ・モレナの山中に足を踏み入れた騎士アルフォンスは、2人の従者の内の1人を失う。

p.27 挿画 (縛り首となった兄弟)

pp.29-32

更に残った従者も失うが、アルフォンスは1人で旅を続ける。

途上、山賊の3兄弟に由来する〈兄弟の谷〉という名前の谷にさしかかると、3兄弟の兄ゾトを除く弟2人が縛り首となり、今もその死体が曝されているのを目にする。

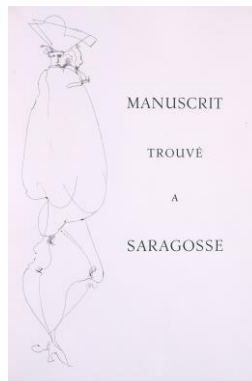
慄然としてその場を離れ、山道を通って次の谷へと入ると、ベンタ・ケマダという廃墟のような宿屋にたどり着く。それは、悪魔に乗っ取られたという止宿禁物の宿であった。名誉・面目を守り、臆病の振る舞いのあるまじきことを心がけて育ったアルフォンスは、戒めに逆らいその宿に宿泊することを決意する。

p.33 挿画 (アルフォンスと2人の女性)

pp.35-36

真夜中になると黒人の女性が部屋に現れ、自身が召使いとして仕えている貴婦人が夕食に招待していると告げる。

空腹に耐えかねていたアルフォンスが広間に入ると、



[原作]

【緒言】

サラゴサ包囲戦に加わったフランス兵が、ある小館でスペイン語の手稿を発見する。その有用さ・意義深さから保存すべき書と考え、兵は手稿をフランス語に翻訳した。以下はその内容である。

【1日目】

スペインのシエラ・モレナ山中を旅していた騎士アルフォンスは、2人の従者を相次いで失いながら、1人で旅を続ける。

途上、〈兄弟の谷〉にさしかかると、3兄弟の兄ゾトを除く弟2人の死体が曝されているのを目にする。

次の谷へと入ると、悪魔に乗っ取られたという止宿禁物の宿屋、ベンタ・ケマダにたどり着く。名誉・面目を守るため、アルフォンスはその宿に宿泊することを決意する。

真夜中になり、夕食に招待されたアルフォンスが広間に入ると、イスラム教徒の美しい姉妹が現れる。

3人分の食事が用意されており、イスラム教徒の美しい姉妹—姉エミナ、妹ジベデーが現れる。

p.37 挿画（横たわるアルフォンスと姉妹）



pp.39-41

2人はアルフォンスに自分たちは同じ一族だと告げ、身の上話を始める。

2人は身の上話を始める。

【エミナとその妹ジベデーの物語】

p.43 扉絵（エミナとジベデー）



pp.45-50

エミナは自分たちの身の上について話す。

エミナとその妹ジベデーの物語

エミナと妹ジベデーは、チュニスの太守に縁故を持つゴメレス家に生まれ、男性を見ることなく育つ。あるとき母親が隠し持っていた本の1冊を盗み出すと、2人はその中で繰り広げられる恋物語を真似て、恋人同士のように愛し合うようになる。その後コーランの教えや自分たちの家の歴史を学ぶうち、2人にそれぞれ結婚の話が舞い込む。生き別れになると絶望する2人に、母親はゴメレスの血筋の男に限るという条件のもと、2人で1人の夫を持つように提案する。

2人は自分たちの身の上や先祖について語る（エミナとその妹ジベデーの物語／カサル・ゴメレスの物語）。

続いて、エミナはアルフォンスの母方につながるゴメレス家の由緒を語る。

カサル・ゴメレスの物語

ゴメレス一族の初代は、イスパニアに乗り込んだアラブ軍勝利の功によって、バグダッド君主よりグラナダ総督に任命されたマスッドであった。バグダッドの怨敵の策略により君主の寵を失い、アルプハラの山中にこもる。シエラ・モレナ山脈に続き、グラナダとパレンシアとの境界をなす連山である。マスッドは先住民の言葉でイスラムの教えを説き、アラブ民族と先住民は通婚により混じり合うこととなった。長老となったマスッドは、カサル・ゴメレス（ゴメレス城）と呼ぶ城を築く。これに忠義を守った一族が、後にゴメレスの姓を名乗るようになる。

p.51 挿画（姉妹と抱き合うアルフォンス）



pp.53-55

エミナの話は続く。

後代ゴメレス家は迫害を受け、幼い子どもらはキリスト教の掟の中で育てられた。イスラムの教えを守った両親たちの財産はこの子どもたち

に分けられた。その頃、ゴメレス家の男が聖ドミニコ派の教団の大審問官となる。

朝が近づくと話は途切れ、エミナの誘いに応じてアルフォンスは夢の中で従妹たちと一夜を過ごす。

p.56

目が覚めると、そこは〈兄弟の谷〉であった。宿で美しい姉妹と過ごしたはずのアルフォンスは、絞首台の真下で、縛り首となっていた2人の亡骸に挟まれて眠っていた。



p.57 挿画 (アルフォンスと2人の骸骨)

pp.59-61

昨夜のことを思い返し、シエラ・モレナ越えをする決意をしたアルフォンスは、宿に戻って馬を駆り、旅を続けた。

その夜の宿を求めて馬を進めたアルフォンスは、ゴシック風の礼拝堂の側にある僧庵にたどり着く。修道僧に迎え入れられ食事をしていると、この世のものとは思えない形相の若者、悪魔に乗り移られたというパシェコが現れる。僧に促され、パシェコは自らの身の上を語る。

【悪魔に憑かれたパシェコの物語】

p.63 扉絵 (絞首台の2人)

pp.65-72

悪魔に憑かれたパシェコの物語

パシェコの父は、妻を失った後に若い女性と再婚した。継母が連れてきた妹に恋したパシェコは結婚を望むが、父に反対される。

その後継母、妹を連れて旅に出た父から迎えに来るよう言われたパシェコは、アルフォンスと似たような旅を経て、ベンタ・ケマダの宿で継母と妹の2人と一夜を過ごす。そして翌日目が覚めると、絞首台の下で2人の死体の間に寝ていたのであった。

その日は別の宿に泊まり、夜になると再び継母たちが現れるが、暖炉の火に照らされたのは、縛り首となった2人の死体であった。男たちから命からがら逃げたパシェコは、行き倒れているところを礼拝堂に連れてこられた。

アルフォンスは修道僧に注意を促され、十字架のある礼拝堂で眠ることになった。パシェコの話と自分の身に起こった出来事を重ねて考えていると、夜半の鐘が鳴り、誰かが訪ねてきた音がした。

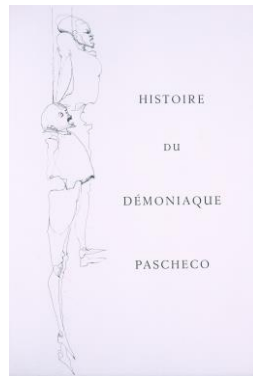
話は途切れ、アルフォンスは夢の中で2人と一夜を過ごす。

【2日目】

目が覚めるとアルフォンスは〈兄弟の谷〉におり、2人の亡骸に挟まれて眠っていた。

アルフォンスは旅を続け、礼拝堂の側にある僧庵にたどり着く。

修道僧に迎えられ食事をしていると、悪魔に乗り移られたパシェコが現れ、身の上話を始める。



パシェコは自身の身の上話とここくるまでの体験を語る(悪魔に憑かれたパシェコの物語)。

礼拝堂で眠ることになったアルフォンスは、訪ねてきた2人の幽霊を追い払う。

p.73 挿画（幽霊を追い払うアルフォンス）



pp.75-76

アルフォンスは剣を手に取り、訪ねてきた2人の幽霊を追い払う。

無事に目覚めたアルフォンスは、修道僧に言われるまま身の上話を始める。

アルフォンス・ヴァン・ウォルデンの物語

アルフォンスは古い家柄に生まれた。父祖代々の資産と言えば貴族としての領地ウォルデンがあるだけで、世の聞こえも高くなければ財産も僅かな家である。

（この後、自らの出生前の父の話、出生後の話、その展開の中で父が神学者に読み上げさせたという幽霊話「ラヴェンナのトリヴルチオの物語」「フェララのランドルフォの物語」が略されている）

pp.77-82

18歳になったアルフォンスは入隊することになり、父から代々の秘密であるという剣法の秘術を授かる。

その後、話は現在の旅へと続き、アルフォンスは旅の途中で2人の従者を失ったこと、ベンタ・ケマダに泊まったことを語る。

修道僧はアルフォンスが首吊り男の死霊に取り憑かれてパシェコのような目にあっただのではないかと問うが、アルフォンスは否定する。

礼拝堂を出て旅を続けたアルフォンスは、異端審問所に逮捕されて土牢に入れられる。

審問の僧は、アルフォンスの前に後ろ手に縛り上げられた姉妹を連れてくる。アルフォンスは姉妹の前で拷問を受けることになるが、そのとき銃声が轟いた。

p.83 挿画（パシェコと女性？）



pp.85-89

銃声とともに、ゾトと手下たちが入ってくる。ゾトに助けられた3人は大岩の陰の岩場で落ち合う。

アルフォンスは姉妹に、ベンタ・ケマダでの一夜が明けた朝のことを責めるが、エミナは、ゴメレス城の秘密を知っている家長の命令通りのことしかできない、

言えることはアルフォンスが非常に近い身内であるということだけだと応じる。夕食をとった後は別々の所で休むことになった。

【3日目】

無事に目覚めたアルフォンスは、身の上話を始める（アルフォンス・ヴァン・ウォルデンの物語）。

自らの出生前の父の話から出生後の話へと展開する話の中で、父が神学者に読み上げさせた、父の曾祖父が書いたという幽霊話の中的一篇が語られる（ラヴェンナのトリヴルチオの物語）。

翌日、再び父は物語の一篇を読み上げさせる（フェララのランドルフォの物語）。

話は現在の旅へと続き、ベンタ・ケマダに泊まったことを語る。

アルフォンスは修道僧にパシェコのような目にあっただのではないかと問われ、否定する。旅を続けたアルフォンスは、逮捕され土牢に入れられる。

【4日目】

アルフォンスは姉妹の前で拷問を受けることになる。

銃声とともに現れたゾトらに助けられ、3人は大岩の陰の岩場で落ち合う。

翌日、ゾトに連れられて廃墟となった村に辿り着いたアルフォンスは、井戸の入口からゾトの住む洞窟に入る。絞首台で亡くなっていた筈の弟2人も姿を現し、3人はゴメレス家の部下として、今後アルフォンスに献身を尽くすという。エミナに今後の計画を問うと、イスパニアに止まるわけにはいかないが、船出の用意ができるまでは休息したいと答える。一行はしばし食事をとりつつ休むことになった。

(この後、エミナに促されたゾトが語った自らの物語「ゾトの物語」「ゾトの物語-つづきの1」「ゾトの物語-つづきの2」が略されている)

p.90

その夜、姉妹はいつもより早めにアルフォンスの元を訪れ、彼が身につけている母親の形見の首飾りを奪い、姉妹の毛髪で編んだ飾りを首にかけるように言う。彼は2人に従い、愛を交わした。

p.91 挿画 (飾りを手にするエミナとジベデ)

pp.93-98

夜中になるとゴメレス家の長老が現れ、アルフォンスにイスラムへの改宗もしくは死を迫る。自ら死を遂げる覚悟をしたアルフォンスは、長老に渡された盃を一気に飲み干し、意識を失った。



目を覚ますと、アルフォンスは例の絞首台の下におり、隣には縛り首になった2人が横たわっていた。その向こうに倒れていたカバラの修験者を起こし、2人で絞首台を出てベンタ・ケマダの宿に向かう。そこで、前夜に姉妹に奪われ岩の割れ目に落ちた首飾りを見つけたアルフォンスは、自分が実はこの宿から出ておらず、修道僧やゾトの弟たちも幻に過ぎないのではと考え始める。

【5日目】

廃墟となった村に辿り着いたアルフォンスは、井戸の入口からゾトの洞窟に入る。弟2人も姿を現し、3兄弟はゴメレス家の部下として、アルフォンスに献身を尽くすという。

ゾトは、エミナに言われて自らの物語を語る(ゾトの物語)。

話は一旦中断し、一同は眠りにつく。その夜、2人の姉妹はアルフォンスの寝所を訪れ、再び3人で一夜を過ごす。

【6日目】

ゾトの物語が続く(ゾトの物語-つづきの1)。

再び話は中断され、アルフォンスらはそれぞれの寝所に戻るが、夜中にはまた2人の姉妹が現れる。

【7日目】

ゾトの物語が続く(ゾトの物語-つづきの2)。

夜になると姉妹はアルフォンスを訪ね、母親の形見の首飾りを奪う。彼は姉妹に従い愛を交わした。

【8日目】

目を覚ますと再び絞首台の下にいた。倒れていたカバラ修験者を起こし、2人でベンタ・ケマダに向かう。奪われた首飾りを見つけたアルフォンスは、自分は宿から出ておらず、修道僧やゾトの弟たちも幻ではな

その後2人は僧庵に向かい、途中で出くわした修道僧とともに到着すると、そこには断末魔のようなパシェコが横になっていた。修道僧に促されてパシェコは昨夜自分の身に起こったことを語る。

パシェコの話

パシェコは呪われた山羊に追われ、背に乗せられて岩屋の奥に辿り着き、アルフォンスと姉妹の姿を見た。姉妹はアルフォンスの首飾りを奪うと首吊り男たちに姿を変えるが、アルフォンスはそれに気づかず夜を過ごす。

夜中に悪魔がやってきて改宗しなければ殺すとアルフォンスを脅し、パシェコはアルフォンスに合図を送るが首吊り男たちに襲われてしまう。

p.99 挿画（2組の女性）



pp.101-105

パシェコの話は続く。

ようやく僧庵の戸口に着くと、首吊り男たちは去って行った。

今朝になって、僧庵の前で意識を失い倒れている所を修道僧に助けられた。

修道僧はアルフォンスに懺悔を迫るが、アルフォンスは自分が見たものとは異なるため、同じベンタ・ケマダの宿に泊まったというカバラ修験者の話を聞くことを提案する。

アルフォンスは再び礼拝堂に宿泊することになる。パシェコの話が本当か、彼に取り憑いた悪魔たちが彼に幻想を見せているのか考えながら、アルフォンスは2人の従妹たちを正当化する動機を心中に探る。

夜半を告げる鐘が聞こえてくると、たちまち戸をたたき音と山羊の鳴き声が響くが、アルフォンスの一喝で静まった。

朝食をとっていると異様な風体の男が現れ、これから行く先で重大な手紙を受け取るようアルフォンスに告げる。カバラ修験者は精霊を使って手紙をこの場に届けさせる。手紙は、異端審問所に対するアルフォンスの不埒な振る舞いを理由に、カスティリャに立ち入ってはならないと告げるものであった。

カバラ修験者は、アルフォンスに頼まれベンタ・ケマダでの一件を話し始める。

【カバラ修験者の物語】

p.107 扉絵（姉妹）

pp.109-112

カバラ修験者の物語

占星術師でカバラにも造詣の深い父から、妹とともにカバラの手ほどきを受けた修験者は、日に日に知識と能力を身につけていった。

父親は、修験者にはソロモン王の双子の娘、妹にはゼウスの双子の息子との

いかと考え始める。

2人が僧庵に向かうと、パシェコが横になっていた。パシェコは昨夜のことを語る（パシェコの話）。

アルフォンスは修道僧に懺悔を迫られるが、カバラ修験者の話を聞くことを提案する。

アルフォンスは再び礼拝堂に宿泊する。夜中に戸をたたき音と山羊の鳴き声が聞こえるが、一喝すると静まった。

【9日目】

朝食をとっていると男が現れ、行く先で重大な手紙を受け取るようアルフォンスに告げる。カバラ修験者は精霊に手紙を届けさせた。

修験者はベンタ・ケマダでの体験を話し始める（カバラ修験者の物語）。



結婚を運命づけてあると告げてその生を終える。

数年後、修験者がソロモン王の雅歌の唱句の研究を始めると、1行、2行と書き上げていく度、鏡の中にソロモン王の双子の娘の足が少しずつ現れるようになる。

p.113 挿画（アルフォンスとカバラ修験者）



pp.115-118

今年になってコルドバに有名な導師が来ると聞き会いにいこうとするが、その日はベンタ・ケマダまでしか行けず、そこに宿泊することにした。夜中になると小さな精霊が現れ、修験者が仕事を逆から始めたために双子の娘は足から現れた、終わりの方の唱句から始めるようにと告げる。それに従い最後の唱句に取りかかると、娘たちの名はエミナとジベデと分かった。

その後預言者が2人の娘を連れて現れ、修験者の首には2人の毛髪を編んだ組紐がかけられる。2人と一夜を過ごした修験者だったが、翌朝目が覚めると絞首台の下にいた。

修験者の話を聞いた修道僧は、修験者やパシェコと同じ運命が待っているとして、アルフォンスに告解を迫る。

修道僧はアルフォンスに告解を迫る。

p.119 挿画（アルフォンスらを出迎えるレベッカ）



pp.121-124

カバラ修験者に誘われ、一行は修験者の館に到着する。夜になって眠り込んでいると、アルフォンスのもとに修験者の妹レベッカが現れる。レベッカは、兄とともに2人の女の悪霊の正体を突き止めようと呪術をかけたがうまくいかないことを告げ、アルフォンスが知っていることを全て教えてほしいと求める。アルフォンスが断ると、レベッカはまた翌晩に訪れると言って出て行った。

一行は修験者の館に到着する。

夜になると、アルフォンスのもとに修験者の妹レベッカが現れる。

レベッカは2人の女の悪霊について尋ねるが断られ、出て行った。

翌朝、テラスで朝の空気を吸い込んだアルフォンスは、これまでの出来事を思い返す。

【10日目】

翌朝、アルフォンスはこれまでの出来事を思い返す。

p.125 挿画（ジプシーの一団）



pp.127-129

アルフォンスが、これまでの出来事を思い返しながら妖怪変化を原因としない説明を考えていると、遠くからジプシーの一団がやって来て近くに小さな天幕を張った。

ジプシーの一団がやって来て天幕を張る。

首長のテントを眺めていると、中から従妹たちが現れた。仲間たちと一緒に踊る

首長のテントから従妹の姉妹が現れるが、

その姿に、アルフォンスは嘲笑するような様子を見た。

地下室に降りて近くで見ると、従妹たちと見えたのは誤りだった。しかしテラスに引き返してから再度見ると、そこに従妹たちの姿が見え、2人は笑いながら天幕に入っていった。

美しい2人が様々に姿を変えて人間を慰み者にし、首吊り男たちの体に移り移って悪行を働いていると考えると、アルフォンスの憤懣は爆発する。

(この後、書庫に入ったアルフォンスが読み始めた奇譚集「**チポー・ド・ラ・ジャキエールの物語**」、その中で主人公が出会った女性の身の上話「**闇の岩**」城の令嬢**ダリオレットの物語**」、その翌日カバラ修験者が読み上げた「**リチアのメニペの物語**」「**哲学者アテナゴラスの物語**」、更にその翌日ジプシーの首長が語った自身の話「**ジプシーの酋長、パンデソウナの物語**」の大部分が略されている)

地下室に降りて近くで見ると、姉妹ではなかった。テラスに引き返し再度見ると、やはり姉妹の姿が見える。

2人が首吊り男たちの体に移り移って悪行を働いていると考えると、アルフォンスの怒りが爆発する。

彼は書庫に入り、机上にあった奇譚集の一篇を読み始める(チポー・ド・ラ・ジャキエールの物語、その中で語られる**闇の岩**城の令嬢**ダリオレットの物語**)。

アルフォンスは、やはり悪魔が首吊り男の体に移り移り、自分はチポーの二の舞を演じたのだと確信する。その夜、アルフォンスはレベッカを待っていたが、彼女は姿を現さなかった。

【11 日目】

アルフォンスはレベッカに起こされる。食事の席で、カバラ修験者はギリシアの哲学者アポロニウスの伝記(リチアのメニペの物語)、次いでプリニウスの書簡集(哲学者アテナゴラスの物語)を読み上げる。席を立ったアルフォンスは、テラスで2人のジプシー娘を見つける。従妹たちかと思ったが、やはりエミナたちではなく、2人はアルフォンスの手相を見て悪魔ばかりにもてるという。

2人に連れられて宿営地に行くと、アルフォンスは老首長に引き合わされた。カバラ修験者の態度が鼻についていたアルフォンスは、首長の申し出により彼のテントに泊まる。

夜中近く、何かの気配で目を覚ますと、両側から誰かがすり寄ってきた。また首吊り男たちかと思ったアルフォンスだったが、それは2人のジプシーの女性だった。

【12 日目】

無事目を覚ましたアルフォンスは、ジプシーたちとともに出発する。首長は税関を買収して商売をしていると語り、自身の話を

【ジュリオ・ロマティとモンテ・サレルノ公女の物語】

p.131 扉絵（骸骨）



pp.133-140

ジプシーの酋長、パンデソウナの物語

首長の話の中で、旅の道すがらの経験談などをしてしていると、それまで黙っていたジュリオ・ロマティが旅の最中に遭遇した不思議な体験談を語る。

ジュリオ・ロマティの物語

ロマティは、法律家として働きながら哲学にも執心していた父に倣い、法律学で博士となったのに続き数学と天文学を学んだ。学問に身を入れすぎて体を壊したロマティは、父に勧められて旅に出ることになる。旅の途中、ロマティは山賊ゾトの難を逃れようと思案にくれていた。そこにゾト本人が現れ、邪魔はしないと行ってロマティに赤い羽根飾りを渡す。

アルフォンスがゾトを知っていると告げると、首長はゾト兄弟も自分と同様ゴメレス家に仕える身だと語る。話は中断するが、アルフォンスは首長までもが自分に関係することに驚き、自分の身に起こっていることの裏で、どんな強大な組織が動いているのかと考えをめぐらせる。その夜は誰と過ごすこともなく終わった。

翌朝、税関の監視員が近づいて来ていることから、一団はその場を発ち、次第にシエラ・モレナの奥深くに入っていく。奥まった谷に到着すると、アルフォンスは首長に話の続きを求め、ジュリオ・ロマティの話が再開される。

パンデソウナの物語—つづきの1

続ジュリオ・ロマティの物語—つづきの1

ロマティが旅を続けていると、山の上にそびえる広大な城に気づく。城は無人で荒れ果てているが、構内に礼拝堂と僧庵があり聖職者数人が住んでいるという。そのうち夕立に襲われ、近くの落雷で驟馬から放り出されたロマティは、1人小さな洞穴にたどり着く。

小降りになると、従者を連れた若者が近づいてきてモンテ・サレルノ公女の使いだと告げ、公女の館へとロマティを案内する。公女本人だと思われる貴婦人が接待役と称してロマティを迎える。

p.141 挿画（三体の骸骨）



pp.143-148

ロマティを迎えた公女が、館の中を案内する。様々な立派な調度や絵画に感心したロマティが、感嘆の余り「天国」のようだと口にすると、公女はそれを咎める。

食事の用意が出来た部屋に入ると、公女は自身の身の上話を始める。

始める（ジプシーの酋長、パンデソウナの物語）。

首長の話の中で、旅の間に会った男による不思議な体験談が語られる（ジュリオ・ロマティの物語）。

首長はアルフォンスにゾト兄弟も自分と同様ゴメレス家に仕える身だと語る。その夜アルフォンスは1人で過ごした。

【13 日目】

翌朝出発した一団は、シエラ・モレナの奥深くに入っていく。奥まった谷に到着すると、首長は話を再開する（パンデソウナの物語—つづきの1、続ジュリオ・ロマティの物語—つづきの1）。

公女は自身の身の上話を始める（モンテ・

モンテ・サレルノ公女の物語

モンテ・サレルノ公爵は、イスパニア、ナポリ王国であらゆる要職を一身に集めていた。その筆頭の家老役にスピナヴェルデ侯爵がおり、その夫人が10歳で母を亡くした公女の教育係となる。父の公爵の没後、公女の侍女たちが次々とやめてしまい、侯爵夫人が新しい侍女として6人の美しい娘たちを連れてくる。

p.149 挿画 (ロマティを案内する公女)



pp.151-155

公女の話が続く。

公女が16歳になった日、グアダマラ大公が求婚に訪れた。それを断ると、侯爵夫人は喜んで独身でいるよう諭して聞かせる。その後も、公女を確実にモンテ・サレルノに引き留めておくために、侯爵夫人は美しい装飾や調度品などを拵えさせた。話の途中、ロマティが再び天国という言葉を口にすると、公女は侍女たちを紹介すると告げ、大きな木箱を開ける。箱の中から骸骨が現れ、自分の骨を剣にして次々とロマティに襲いかかった。許しを乞うと、公女は口外しないようにロマティに命じ、その腕をつかむ。気を失ったロマティの腕には、5本の指の跡が火傷になって残った。

アルフォンスは首長の話に口をはさみ、修験者の家の書庫でロマティの話と殆ど同じ物語を見たと言ふ。アルフォンスに促された首長が、山中で暮らす内に見た不思議な出来事を語ろうとするが、1人のジプシーにより話は中断された。その夜も、前夜同様眠りを妨げられることはなかった。

(この前後の文章は日本語訳文と内容や順序が異なっている部分がある)

【レベッカの物語】

p.157 扉絵 (レベッカ)



pp.159-166

アルフォンスが再び絞首台に行ってみると、二つの死体が地面に横たわっており、その間にレベッカが寝ているのが見えた。助け起こしたアルフォンスに、レベッカは自身の話を語る。(話し始める前の1文が略されている)

レベッカの物語

兄と異なり、レベッカはカバラの修行に身が入らず、怠けていた。見かねた兄が基本と一緒に復習しているうち、レベッカもカバラに愛着を持つようになる。

その頃、召使いの男女が愛を交わしているのを目にしたレベッカは、しばらく

サレルノ公女の物語)。

話が終わり、アルフォンスが山歩きに出ると、遠くにゾトの兄弟の絞首台らしきものが見えた。近づいて見ると、二つの死体がぶら下がっていた。

戻ったアルフォンスに、首長は死体がぶら下がっていたかを確認し、夜中を過ぎると死体が下がっていないことが始終あると言った。

【14日目】

アルフォンスが再び絞首台に行くと、二つの死体の間にレベッカが寝ていた。助け起こすと、レベッカは自身の話を語る(レベッカの物語)。

く目が覚めたままで夢を見ているような日々を過ごす。兄に促されて外で力試しをすることになったレベッカは、山頂で不思議な力を身につける。兄の修験者が鏡の中に双子の娘を見るようになった頃、レベッカも姿見の中にゼウスの双子の息子と思しき半神半人の2人を見た。

p.167 挿画（鏡の中に双子を見るレベッカ）



pp.169-175

その後、兄は有名な導師に会おうと出かけ、ベンタ・ケマダにたどり着く。兄はそこで一夜を過ごした後アルフォンスを連れて戻り、レベッカに自分の体験やパシェコの話をする。

悪魔の正体が分からず、アルフォンスも何も語らないため、レベッカは自分でベンタ・ケマダに泊ってみる決心をした。部屋に入ると、背の高い若者が2人おり、食事をしながら歌っていた。半神半人の2人にそっくりだと思われたとき、2人は自分たちが双子でカストルとポルックスだと告げる。

（この前後の会話の一部が略されている）

レベッカは2人に空中高く連れ去られるが、兄とレベッカだけが唱えることができる聖なる名を唱えると、真逆さまに地上に落ち、気がつくともアルフォンスに呼び起こされていた。

（レベッカの話が終わったところで終了）

アルフォンスは、レベッカの話はでたらめで、ゴメレス家の連中とグルになってイスラム教に改宗させようとしているか、他の動機から従妹たちの秘密を探り出そうとしているのではないか、あるいは従妹たちが悪魔でないとすれば、やはりゴメレス家の回し者ではないかと考える。

レベッカは兄と共に戻っていき、天幕に戻ったアルフォンスは更に考えを巡らせるが、何も結論が見つからないまま眠りについていた。